

乙金第二土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ

乙金地区遺跡群Ⅰ

～薬師の森遺跡第3次調査・雉子ヶ尾遺跡第2次調査～

大野城市文化財調査報告書 第90集

2009

大野城市教育委員会

乙金第二土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ

おとがなちく いせきぐん
乙金地区遺跡群Ⅰ

やくし もりいせき きじがおいせき
～薬師の森遺跡第3次調査・雉子ヶ尾遺跡第2次調査～

大野城市文化財調査報告書 第90集

2009

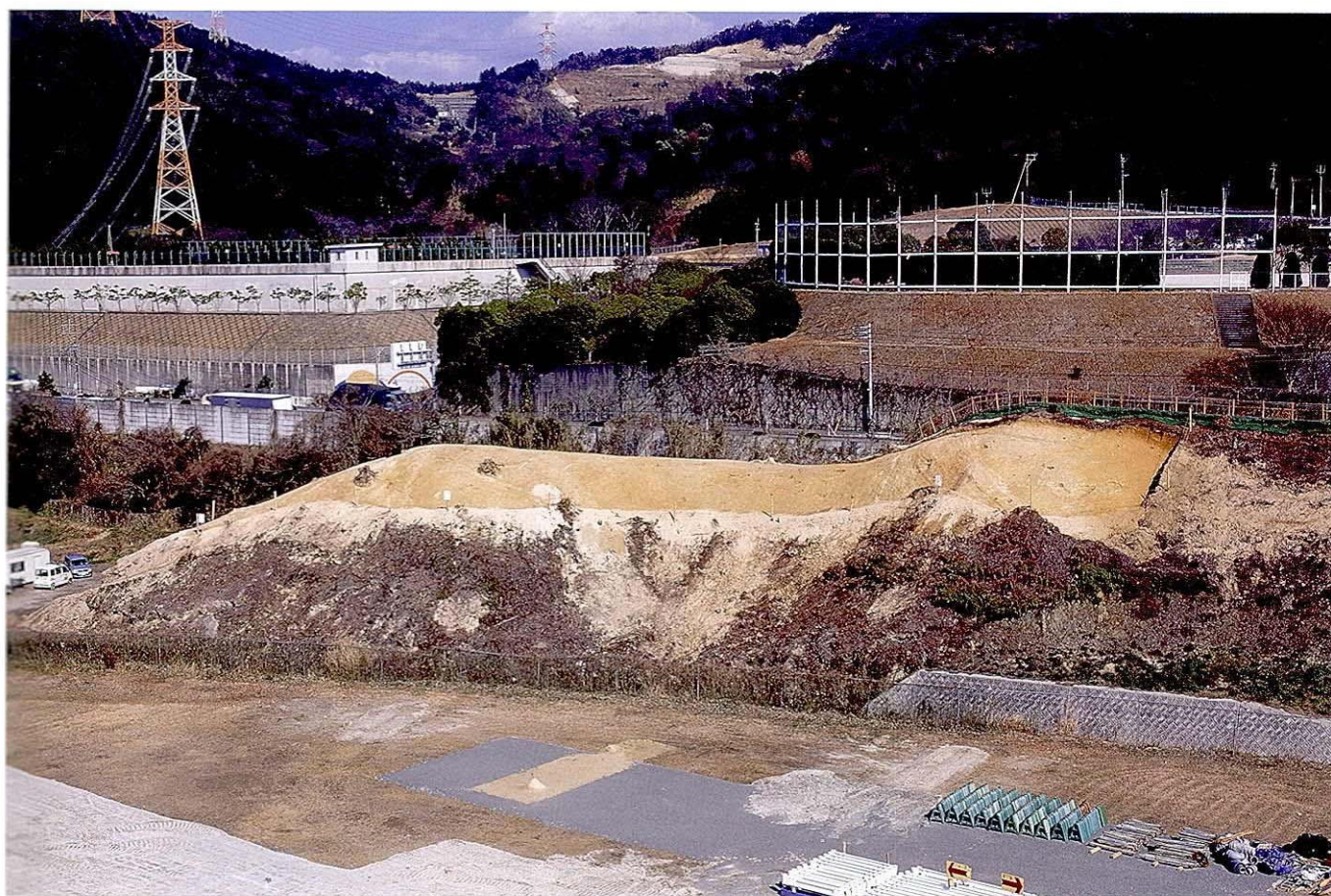
大野城市教育委員会



乙金第二土地区画整理事業地内航空写真（上が北）



(1) 薬師の森遺跡第3次調査全景（南から）



(2) 雉子ヶ尾遺跡第2次調査全景（西から）



(1) 薬師の森遺跡第3次調査SX11全景（東から）



(2) 薬師の森遺跡第3次調査SX11出土遺物

序

乙金地区では事業面積が41.2haにおよぶ大規模な区画整理事業が計画され、平成19年度より本格的な発掘調査を実施しております。

本書は乙金第二土地区画整理事業にともなう初めての発掘調査報告書になります。調査では縄文時代から平安・鎌倉時代にかけての遺構・遺物が出土し、人々の暮らしが連綿と続いていたことがわかりました。特に薬師の森遺跡第3次調査で見つかった木棺墓からは、たくさんの中国産青磁が出土し、大変貴重な発見となりました。一つの墓から青磁がまとまって出土することは珍しく、木棺墓に葬られた人物は非常に高い階層の人であったと考えられます。

遺跡は土地に刻まれた歴史であり、我々にたくさんのことを教えてくれます。こうした遺跡を記録し、報告書というかたちで広く一般に公開するとともに、後世へと伝えていけるよう努めています。本書が文化財の理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究や教育の面で広く活用していただけたら幸いです。

最後になりましたが、乙金第二土地区画整理組合をはじめ、(株)清水建設、工事関係者及び地元の方々にご理解とご協力をいただきましたことに対し厚く御礼申し上げます。

平成21年3月31日

大野城市教育委員会

教育長 古賀 宮太

例 言

1. 本書は、大野城市教育委員会が乙金第二土地区画整理事業にともなって発掘調査を実施した、大野城市乙金3丁目所在の「薬師の森遺跡第3次調査」及び大野城市大字乙金所在の「雉子ヶ尾遺跡第2次調査」の報告書である。
2. 発掘調査は大野城市乙金第二土地区画整理組合の委託を受け、大野城市教育委員会が実施した。なお試掘調査の一部については、文化庁および福岡県の補助事業として実施した。
3. 遺構写真は、上田龍児が撮影した。
4. 遺物写真は、(有)文化財写真工房(岡紀久夫、埋蔵文化財写真研究会員)が撮影した。
5. 遺構平面実測図は大里弥生、上田が作成し、(株)埋蔵文化財サポートシステム福岡支店にデジタルトレースを委託した。なお、地形測量図のコンターは25cm間隔である。
6. 遺構実測図中の方位は磁北を表し、図上の座標は国土座標(第II系)を示す。また図中の標高は、乙金第二土地区画整理組合が提供した4級基準点網図の成果を使用している。
7. 遺物実測図は、甲斐康大、上田が作成した。
8. 製図は、渡部美香、甲斐が作成し、遺構平面配置図は(株)埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
9. 拓本は、中島圭、甲斐が作成した。
10. 観察表は、甲斐が作成した。
11. 本書に掲載した遺跡分布図は、国土地理院発行の1/25,000地形図『福岡南部』『太宰府』を使用した。
12. 遺物の名称のうち、須恵器蓋杯については平城宮分類、輸入陶磁器については太宰府分類(太宰府市教育委員会『太宰府条坊跡XV』2000年(太宰府市の文化財第49集))による呼称を用いる。また、須恵器の編年に関しては、牛頸編年(大野城市教育委員会『牛頸窯跡群―総括報告書Ⅰ―』2008年(大野城市文化財調査報告書第77集))に拠る。
13. 本書の遺物・実測図・写真はすべて大野城市教育委員会が管理・保管している。
14. 本書に使用する土色名は、『新版標準土色帖』農林水産省技術会議事務局監修を使用している。
15. 本書の執筆は、Ⅰを林潤也、他を上田が担当し、編集は上田がおこなった。

本文目次

I. はじめに

- 1. 調査にいたる経緯…………… 1～2
- 2. 平成18・19年度の調査経過 …… 3～7
- 3. 調査体制…………… 7～8

II. 位置と環境

- 1. 地理的環境…………… 9
- 2. 歴史的環境…………… 9～14

III. 葉師の森遺跡第3次調査

- A. 調査概要…………… 15～16
- B. 遺構と遺物…………… 16～34
- C. 小結…………… 34

IV. 雉子ヶ尾遺跡第2次調査

- A. 調査概要…………… 35
- B. 遺構…………… 35～38
- C. 小結…………… 38

V. まとめ

- 1. 葉師の森遺跡第3次調査検出遺構の性格と土地利用の変遷…………… 39
- 2. 葉師の森遺跡第3次調査検出の木棺墓（S X11）について …… 39～40

挿 図 目 次

第1図	乙金第二土地区画整理事業地計画平面図……………	2
第2図	平成18・19年度乙金第二土地区画整理地内試掘調査および薬師の森遺跡第3次調査・ 雉子ヶ尾遺跡第2次調査地位置図（1／5,000）…	4
第3図	乙金第二土地区画整理事業地周辺旧地形図（1961年撮影）（1／5,000）……………	5
第4図	周辺遺跡分布地図……………	11～12
第5図	薬師の森遺跡第3次調査遺構配置図（1／200）……………	15
第6図	薬師の森遺跡第3次調査SB01・02実測図（1／60）……………	17
第7図	薬師の森遺跡第3次調査SB01出土遺物実測図（1／3）……………	18
第8図	薬師の森遺跡第3次調査SC01実測図（カマド実測図は1／30、他は1／60）……………	19
第9図	薬師の森遺跡第3次調査SC01出土遺物実測図（25・26は1／6、他は1／3）……………	20
第10図	薬師の森遺跡第3次調査SX01実測図（1／40）……………	22
第11図	薬師の森遺跡第3次調査SX02・04・06～08実測図（1／40）……………	23
第12図	薬師の森遺跡第3次調査SX01・02・04・07・08出土遺物実測図 （37は1／6、28・31・38は1／2、他は1／3）…	24
第13図	薬師の森遺跡第3次調査SX09実測図（1／40）……………	25
第14図	薬師の森遺跡第3次調査SX09出土遺物実測図（1／3）……………	26
第15図	薬師の森遺跡第3次調査SX11実測図（1／20）……………	28
第16図	薬師の森遺跡第3次調査SX11出土遺物実測図（69・73は1／2、他は1／3）……………	29
第17図	薬師の森遺跡第3次調査SX10・12～15実測図（1／40）……………	31
第18図	薬師の森遺跡第3次調査SX10・12・13出土遺物実測図（1／3）……………	32
第19図	薬師の森遺跡第3次調査SX16～18実測図（1／40）……………	33
第20図	薬師の森遺跡第3次調査ピット、その他の出土遺物実測図（1／3）……………	33
第21図	雉子ヶ尾遺跡第2次調査遺構配置図（1／300）……………	36
第22図	雉子ヶ尾遺跡第2次調査SX01～03実測図（1／40）……………	37
第23図	雉子ヶ尾遺跡第2次調査SX04～06、SP01・02実測図（1／40）……………	38

表 目 次

第1表	大野城市域における11～13世紀の墳墓……………	40
第2表	薬師の森遺跡第3次調査出土遺物観察表①・②……………	41～42

図 版 目 次

- 巻頭図版 1 乙金第二土地区画整理事業地航空写真
- 巻頭図版 2 (1)薬師の森遺跡第3次調査地全景(南から)
(2)雉子ヶ尾遺跡第2次調査地全景(西から)
- 巻頭図版 3 (1)薬師の森遺跡第3次調査SX11全景(東から)
(2)薬師の森遺跡第3次調査SX11出土遺物
- 図版 1 (1)薬師の森遺跡第3次調査地調査前風景(南東から)
(2)薬師の森遺跡第3次調査遺構検出状況(南東から)
(3)薬師の森遺跡第3次調査作業風景(西から)
- 図版 2 (1)薬師の森遺跡第3次調査SB01全景(南から)
(2)薬師の森遺跡第3次調査SB02全景(北東から)
- 図版 3 (1)薬師の森遺跡第3次調査SC01全景(南から)
(2)薬師の森遺跡第3次調査SC01全景(西から)
- 図版 4 (1)薬師の森遺跡第3次調査SC01検出状況(南から)
(2)薬師の森遺跡第3次調査SC01南北土層(東から)
(3)薬師の森遺跡第3次調査SC01東西土層(南から)
- 図版 5 (1)薬師の森遺跡第3次調査SC01カマド検出状況(西から)
(2)薬師の森遺跡第3次調査SC01カマド土層(西から)
(3)薬師の森遺跡第3次調査SC01カマド全景(西から)
- 図版 6 (1)薬師の森遺跡第3次調査SX01土層(南から)
(2)薬師の森遺跡第3次調査SX01上面ピット検出状況(南から)
(3)薬師の森遺跡第3次調査SX01底面ピット検出状況(南から)
- 図版 7 (1)薬師の森遺跡第3次調査SX01底面ピット杭痕検出状況(南から)
(2)薬師の森遺跡第3次調査SX01底面ピット杭痕完掘状況(南から)
(3)薬師の森遺跡第3次調査SX01全景(東から)
- 図版 8 (1)薬師の森遺跡第3次調査SX06土層(南から)
(2)薬師の森遺跡第3次調査SX06全景(南から)
(3)薬師の森遺跡第3次調査SX08全景(東から)
- 図版 9 (1)薬師の森遺跡第3次調査SX09土層(南から)
(2)薬師の森遺跡第3次調査SC09全景(南から)
- 図版10 (1)薬師の森遺跡第3次調査SX11調査風景(南から)
(2)薬師の森遺跡第3次調査SX11土層(南から)
(3)薬師の森遺跡第3次調査SX11遺物出土状況(東から)
- 図版11 (1)薬師の森遺跡第3次調査SX11全景(西から)
(2)薬師の森遺跡第3次調査SX11遺物出土状況(南から)

- 図版12 (1)雉子ヶ尾遺跡第2次調査SX01土層(西から)
(2)雉子ヶ尾遺跡第2次調査SX01(北から)
- 図版13 (1)雉子ヶ尾遺跡第2次調査SX02全景(東から)
(2)雉子ヶ尾遺跡第2次調査SX03全景(北から)
(3)雉子ヶ尾遺跡第2次調査SX04全景(南から)
- 図版14 (1)雉子ヶ尾遺跡第2次調査SX05全景(北から)
(2)雉子ヶ尾遺跡第2次調査SX06全景(南から)
(3)雉子ヶ尾遺跡第2次調査SP01・02全景(北から)
- 図版15 薬師の森遺跡第3次調査出土遺物①
- 図版16 薬師の森遺跡第3次調査出土遺物②
- 図版17 薬師の森遺跡第3次調査出土遺物③
- 図版18 薬師の森遺跡第3次調査出土遺物④

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

大野城市乙金地区は、市域北東側に位置し、大城山（通称 四王寺山）（標高410m）および乙金山（標高263m）の西側裾部にあたる。調査の原因となった乙金第二土地区画整理事業は、乙金地区の東側、九州縦貫自動車道の西側に沿うように計画され、現在の行政区域では大字乙金、乙金2・3丁目、乙金東1丁目の各一部に相当する。事業地は南北に長く（約1.6km）、施行面積41.2haにもおよぶ。事業前の土地利用状況は、住宅地2.6ha（6.7%）、農地8.5ha（21.7%）、公共用地3.0ha（7.5%）、山林・その他25.3ha（64.1%）からなり、概ね事業地の東側は山林、西側は既存集落を含む田園風景が広がっている。区画整理事業によって、この景観は一変し、豊かな自然を生かしながらも、計画戸数約500戸、計画人口約1600人からなる利便性の高い街づくりが計画されている。乙金第二土地区画整理事業の経緯については下表のとおりである。

平成8年	『世話人会』発足
平成14年	『推進委員会』発足
平成17年 9月	『組合設立準備委員会』発足
平成19年 3月	組合設立認可公示・第1回総会開催
平成19年10月	都市計画決定・市街化区域編入
平成19年12月	起工式開催
平成20年 2月	事業計画認可公示

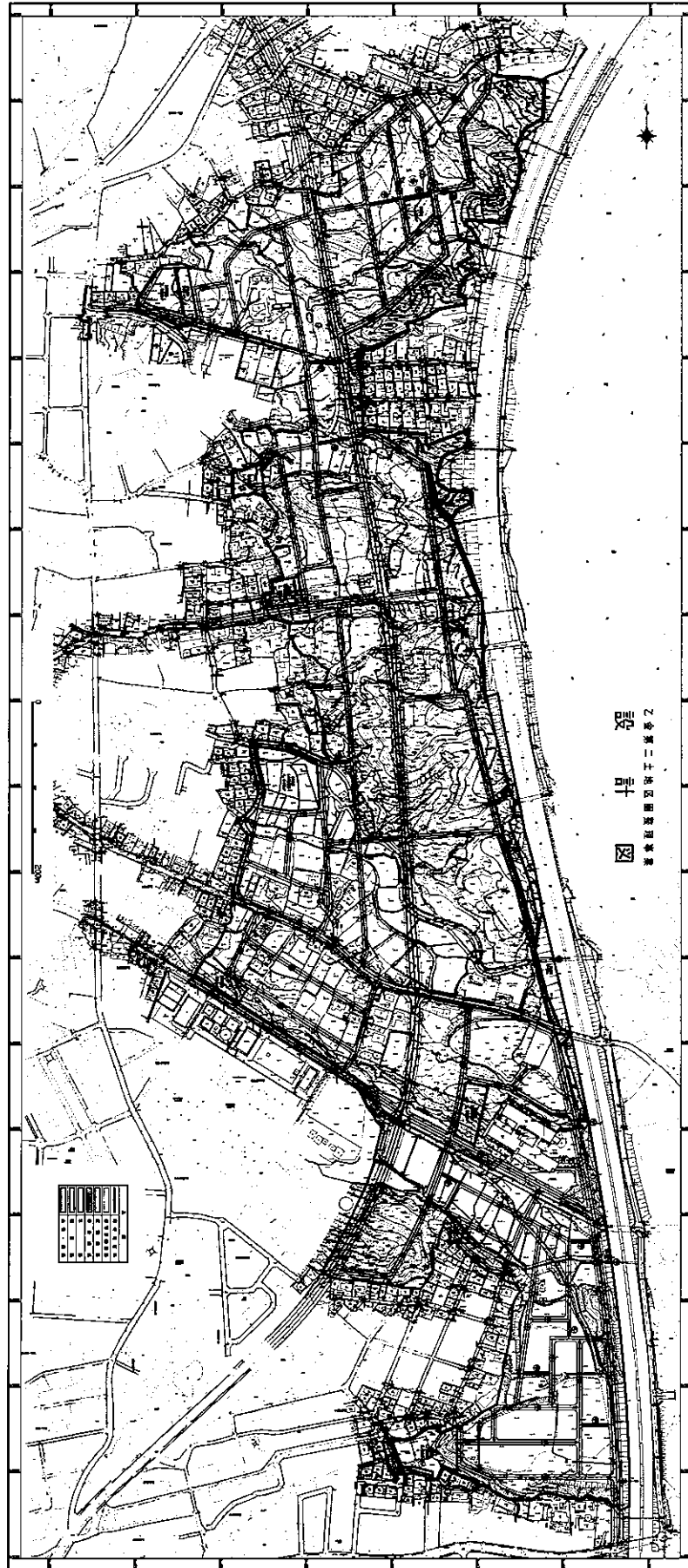
文化財については、平成16年11月より区画整理課企画指導担当と協議を開始した。埋蔵文化財に関しては、九州縦貫自動車道建設に伴う発掘調査の際に、王城山古墳群・喜一田古墳群・古野古墳群などの古墳群や窯跡が調査された一方で、元来宅地開発等の事業が少ない地域であったことから集落遺跡の存在は全く知られておらず、早期の試掘調査の実施と、すでに確認されている古墳群の一部について現地保存の協力を求めた。

また埋蔵文化財以外の文化財に関しては、未指定物件ながら「享保子丑餓死枯骨塔」（享保の大飢饉の際に無縁仏となった死者への供養塔）や「乙金宝満宮社叢」などが地域を代表する貴重な文化財として知られており、これらについても可能な限り現地保存できるように求めた。

調査費用については、市の内規に基づいて原則的に市と原因者である乙金第二土地区画整理組合とが折半することとし、調査開始時期・着手箇所については、平成18年度末から休耕が確定した範囲を対象として試掘調査を実施することで協議が整った。

こうした協議を踏まえて、平成19年3月15日付けで「乙金第二土地区画整理事業地内に関する協定書」を、同月16日付けで平成18年度の契約を締結し、3月20日より試掘調査を開始した。

本格的な試掘・発掘調査は平成19年度から開始し、文化財保護法第93条に基づく届出を平成19年11月30日（大教文848号）に行い、12月7日付け（19教文第4号－585）で県教育委員会からの通知があった。



第1図 乙金第二土地区画整理事業地計画面

2. 平成18・19年度の調査経過

平成18年度の、乙金第二土地区画整理地内における文化財調査としては、平成19年3月20日～3月23日に試掘調査を1件（1次試掘調査）実施した。

1次試掘調査（大字乙金183－2外）は、事業地の西側の谷部、山目池の南側水田を対象とした。南北の丘陵部との比高差は10数mを測り、現況では比較的深い谷部に相当する。調査の対象面積は約3,800㎡で、バックホーを用いて計10本のトレンチを掘削した。その結果、一部黒色系の粘質土を挟みながら粗砂層が厚く堆積する状況が明らかとなり、遺構・遺物とも確認することはできなかった。

平成19年度は、平成19年4月19日～平成20年3月11日に試掘調査15件（2次～16次試掘調査）、および発掘調査を2件（雉子ヶ尾遺跡第2次調査・薬師の森遺跡第3次調査）実施した。このうち、2次～14次試掘調査については、文化庁および福岡県の補助事業として行った。

2次試掘調査（大字乙金178－1外）は、1次試掘調査地点の西側隣接地、谷部の上流側にあたる。調査対象面積は約9,500㎡で、バックホーを用いて計28本のトレンチを掘削した。その結果、黒色系の粘質土を挟みながら粗砂層が厚く堆積する状況が明らかとなり、多くのトレンチで著しく湧水した。地山（硬質の花崗岩パイラン土）は、対象地南辺でわずかに確認できたのみであった。遺構・遺物とも検出することはできなかった。

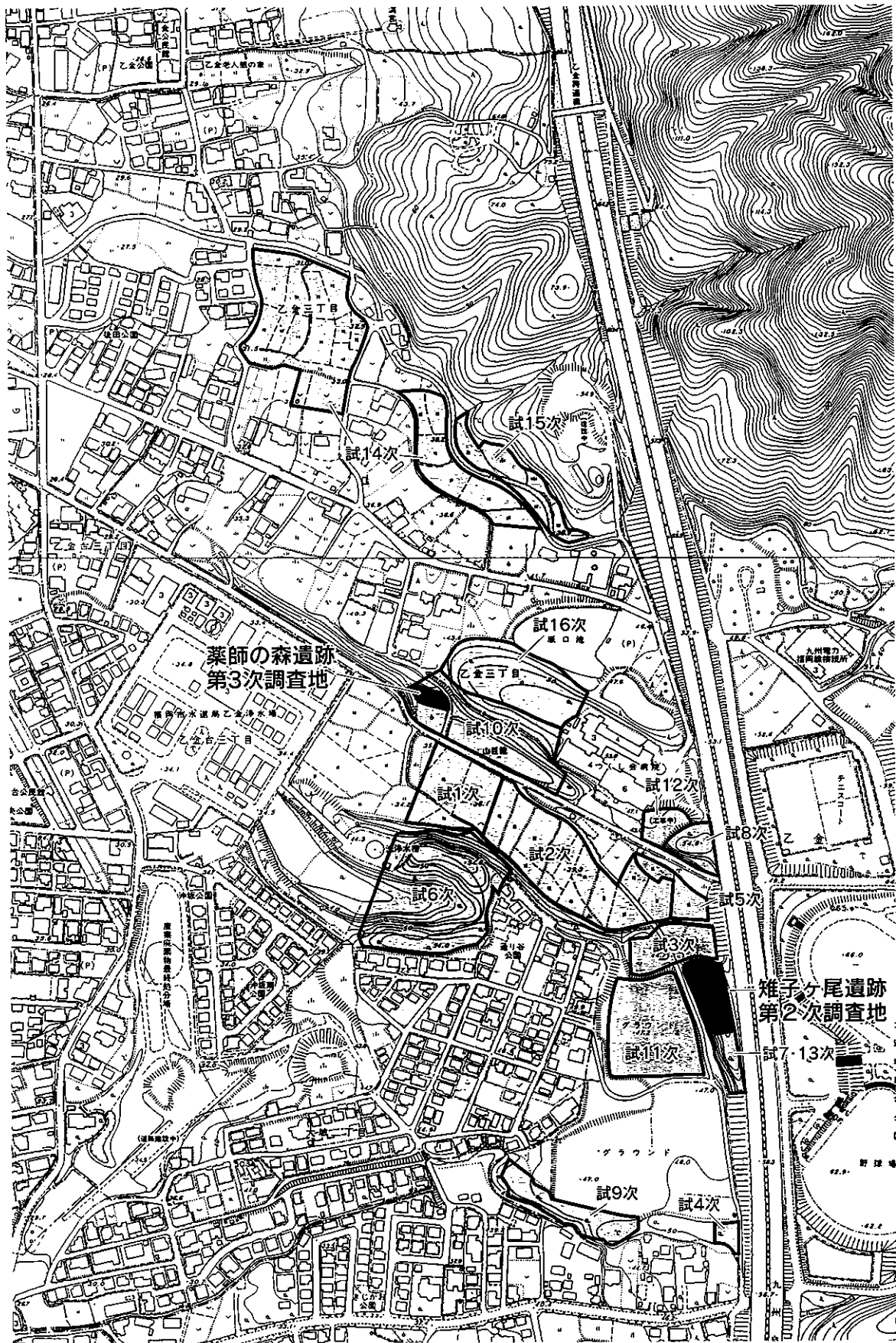
3次試掘調査（大字乙金14－15外）は、2次試掘調査地点の南東側隣接地、谷部の上流側にあたる。調査対象面積は約2,300㎡で、バックホーを用いて計7本のトレンチを掘削した。対象地東側については、南側隣接地の丘陵が急激に落ち込む状況が確認できた。これ以外のトレンチについては、粗砂と粘質土が厚く堆積していた。遺構・遺物とも確認することができなかった。

4次試掘調査（大字乙金38外）は、区画整理事業地の南東隅、丘陵の南斜面に位置する。西側隣接地には雉子ヶ尾3号墳が現存している。調査対象面積は約350㎡で、バックホーを用いてほぼ全域の表土を除去し遺構検出を試みたが、これを確認することはできなかった。表土中から須恵器甕片が出土した。

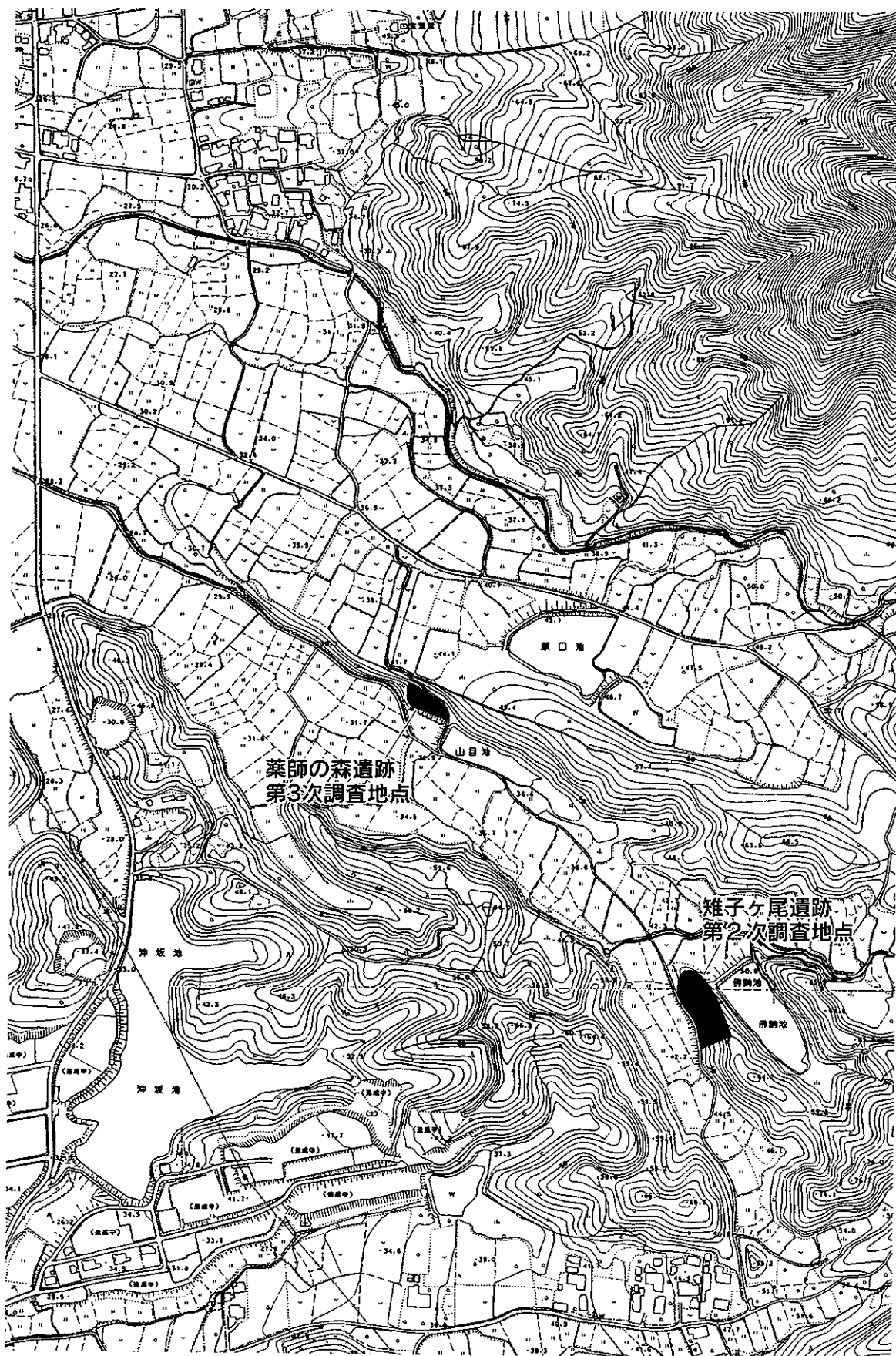
5次試掘調査（大字乙金175－1外）は、3次試掘調査地点の北側に隣接する。調査対象面積は約1,100㎡で、バックホーを用いて計5本のトレンチを掘削した。いずれのトレンチでも、粗砂・粘質土が厚く堆積し、現地表下2m程度から著しい湧水があった。2次調査地から連続する谷部に相当することが明らかとなった。遺構・遺物とも確認することができなかった。

6次試掘調査（大字乙金108－1外）は、1・2次試掘調査地点の南側に隣接する丘陵部にあたる。丘陵は南北二股に分かれ、これに挟まれた谷部との比高差は最大18mをはかる。調査対象面積は約7,900㎡。古墳や須恵器窯跡の存在を予測し、尾根部周辺および斜面下方を中心にバックホーを用いて計21本のトレンチを掘削した。現地表下20～90cmで地山を確認したが、いずれのトレンチでも遺構を検出することはできなかった。黒曜石製の剥片が1点出土した。

7次試掘調査（大字乙金13－2外）は、3次試掘調査地点の南側、11次試掘調査地点の東側に隣接する痩せ尾根状の丘陵部にあたる。調査対象面積は約3,200㎡で、バックホーを用いて計7本のトレンチを掘削した。尾根上に設定したトレンチにおいて、現地表下30cmの深さで遺構（土坑）



第2図 平成18・19年度乙金第二土地区画整理地内試掘調査および薬師の森遺跡3次調査・雉子ヶ尾遺跡2次調査地位置図 (1 / 5,000)



第3図 乙金第二土地区画整理事業地周辺旧地形図（1961年撮影）（1 / 5,000）

を検出した。急峻な地形のため、斜面部の調査が十分にできず、この部分については人力で補足調査（13次試掘調査）を実施した。遺物は出土しなかった。なお当該地は、**雉子ヶ尾遺跡第2次調査**として発掘調査を実施した。

8次試掘調査（乙金3丁目553-1外）は、5次試掘調査地点の北側の丘陵部にあたり、7次試掘調査地点とは谷を挟んで対峙する。調査対象面積は約1,400㎡で、バックホーを用いて計17本のトレンチを掘削した。現地表下25～80cmで地山を確認したが、いずれのトレンチでも遺構・遺物を検出することはできなかった。

9次試掘調査（大字乙金121-1外）は、区画整理事業地の南端、丘陵の南斜面に位置する。調査対象面積は約1,900㎡で、バックホーを用いて計14本のトレンチを掘削した。現地表下10～135cmで地山を確認したが、いずれのトレンチでも遺構・遺物を検出することはできなかった。

10次試掘調査（乙金3丁目552-1外）は、1・2次試掘調査地点の北側に位置する。概ね丘陵部の南斜面にあたり、地形的には山目池北側の急斜面部と北西側の緩斜面部に分けられる。調査対象面積は約7,000㎡で、バックホーを用いて計29本のトレンチを掘削した。急斜面部では、現地表下30～80cmで橙色土系の地山を確認したが、遺構を検出することはできなかった。緩斜面部は現況で2面（2段）の畑（南側は栗林）からなり、このうち上段の畑に設定したトレンチでは、現地表下20～80cmで遺構（土坑・ピットほか）と遺物を確認した。なお、下段の畑に設定したトレンチでは地山すら確認することができず、南側に向かって急激に落ち込む状況が明らかとなった。なお、緩斜面部については、平成19年度に**薬師の森遺跡第3次調査**として発掘調査を実施した。

11次試掘調査（大字乙金119-1外）は、7・13次試掘調査地点の西側、3次試掘調査地点の南側に隣接し、グラウンドとして利用されていた。調査対象面積は約6,100㎡で、バックホーを用いて計11本のトレンチを掘削した。その結果、対象地の西側の一部で大きく削平された地山が確認できたものの、中央部から東側にかけては粘質土が厚く堆積しており、この部分については2・3次試掘調査地点から続く谷部であることが明らかとなった。遺構・遺物とも確認することはできなかった。

12次試掘調査（乙金3丁目554-5外）は、8次試掘調査地点の西側、5次試掘調査地点の北側に隣接し、駐車場として利用されていた。調査対象面積は約800㎡で、バックホーを用いて計4本のトレンチを掘削した。その結果、対象地南東側では、大きく削平された地山が確認でき、北西側に向かって急激に落ち込む状況がみられた。遺構・遺物とも検出することはできなかった。

13次試掘調査（大字乙金13-2外）は、7次試掘調査の補足調査として実施した。7次試掘調査で確認された遺構の広がり把握するため、急斜面部に人力で9本のトレンチを掘削した。遺構・遺物とも確認することができず、遺構の広がりが限定的であることが明らかとなった。

14次試掘調査（乙金3丁目525外）は、19年度試掘調査地点の最北部に位置する。対象地は東西（西地区・東地区）に分離できるが、大部分は一連の浅い谷部にあたり、水田として利用されていた。調査対象総面積は約13,600㎡で、バックホーを用いて計55本（西地区39本、東地区16本）のトレンチを掘削した。西地区では、ほとんどのトレンチで、黒色系の粘質土を挟む粗砂層および礫層が厚く堆積しており、激しく湧水するトレンチも数多く見られた。ただし対象地北側の一部では、礫層上に安定した硬質のシルト質土が厚く堆積しており、この部分については自然堤防状

に陸化していた可能性が高い。対象地南側を中心に須恵器・土師器等が出土したが、この段階では遺構を確認することはできなかった。東地区でも、一部粘質土を挟みながら粗砂層が厚く堆積しており、激しく湧水するトレンチも見られた。現地表下170～400cmで地山（硬質パイラン土）を確認したが、遺構・遺物とも検出することはできなかった。試掘調査の結果、区画整理組合には本調査の必要がない旨の回答を行ったが、西地区（谷部）については、平成20年度に南側隣接地（丘陵部）を調査（薬師の森遺跡第5次調査）する際に、対象地南側で水田畦畔を検出した。急遽、区画整理組合と協議を行い、調査区を大幅に拡張して発掘調査を実施することとなった。

15次試掘調査（乙金3丁目665-1外）は、14次試掘調査地点（東地区）の北側に隣接する。丘陵部の落ち際にあたり、水田・畑として利用されていた。調査対象面積は約2,400㎡で、バックホーを用いて計17本のトレンチを掘削した。その結果、大部分のトレンチでは砂・粘質土が厚く堆積しており、丘陵が急激に落ち込む状況がみられたが、最も標高の高い対象地東端において、現地表下170cmの深さで遺構（ピット）と遺物（近世陶磁器）を確認した。発掘調査は次年度以降に実施予定である。

16次試掘調査（乙金3丁目552-2外）は、10次試掘調査地点の北側に隣接し、丘陵尾根線から北斜面に位置する。調査対象面積は約5,600㎡で、バックホーを用いて計20本のトレンチを掘削した。その結果、現地表下20～60cmで黄橙色系の地山を確認し、この上面において遺構（土坑・ピット）を検出した。また、須恵器・土師器が出土した。当該地については、平成20年度に**薬師の森遺跡第4次調査**として発掘調査を実施した。

以上のとおり、平成18・19年度には、16次にわたる試掘調査を行ない、このうち4地点で遺構を確認した。これに基づいて、平成19年度には下表のとおり発掘調査を実施した。

	遺跡名	試掘調査回数	発掘調査期間	調査面積(㎡)	担当
平成19年度 発掘調査	雉子ヶ尾遺跡 第2次調査	7・13次	平成20年1月24日 ～2月7日	約690㎡	上 田
	薬師の森遺跡 第3次調査	10次	平成20年2月14日 ～3月31日	約400㎡	上 田

3. 調査体制

平成18～20年度

大野城市教育委員会	教 育 長	古 賀 宮 太
	教育部長	小 嶋 健（～平成20年3月）
		森 岡 勉（平成20年4月～）
	ふるさと文化財課長	舟 山 良 一
	文化財担当係長	中 山 宏

主 査	徳 本 洋 一
	石 木 秀 啓
	丸 尾 博 恵
主任技師	林 潤 也
	早 瀬 賢
技 師	上 田 龍 児 (平成19年4月～)
嘱 託	粟 津 剛 史 (～平成18年6月)
	井 上 愛 子 (～平成19年3月)
	石 川 健 (平成19年7月～)
	遠 藤 茜 (平成19年4月～)
	大 里 弥 生 (平成19年10月～)
	岡 田 裕 之 (平成18年5月～平成19年3月)
	甲 斐 康 大 (平成20年4月～)
	城 門 義 廣 (～平成19年8月)
	田 尻 義 了 (平成19年4月～6月)
	玉ノ井 博 紀 (平成20年10月～)
	中 島 圭 (平成20年4月～)
	能 塚 由 紀 (平成18年8月～平成20年8月)

発掘調査作業員

岡本妙子 大海雅子 高木幸子 藤田和子 前田チエ子 田中照子 中垣親
岩切ふえ 日野律子

整理作業員

松岡信子 町井裕子 鬼塚穂子 白井典子 村山律子 渡部美香 仲村美幸

なお、薬師の森遺跡第3次調査の木棺墓については、中島恒次郎氏（太宰府市教育委員会）にご教示を頂きました。また、同遺構出土鉄釘のX線写真撮影については、福岡市埋蔵文化財センターにご協力を頂きました。感謝申し上げます。

II. 位置と環境

1. 地理的環境

大野城市の位置する福岡平野は、南を背振山地、東を三郡山地に挟まれ、北は博多湾に面している。平野中央部に那珂川・御笠川が貫流し、広大な沖積平野を形成する。大野城市は福岡平野東南部の最奥部に位置し、平野が狭くなる地峡部にあたる。古代以来この地峡部は交通の要衝で、現在でも九州縦貫自動車道・JR鹿児島本線・西鉄大牟田線・国道3号線など九州の南北を結ぶ幹線道が走っている。市域は東側を月隈丘陵に連なる乙金山・四王寺山、南側を牛頸山に挟まれ、中央に御笠川が貫流する。山地は早良花崗岩からなり、風化が著しく真砂土となっており、山麓部から平地丘陵部にかけて段丘が発達する。高位段丘は開析がすすみ、中位段丘は平坦部も多く、平野部では沖積地が広がる。

乙金地区遺跡群は市域東部にあたり、乙金山・四王寺山から西にのびる緩やかな丘陵上に位置する。丘陵は花崗岩を基盤とするが、中小の河川によって開析された谷部では砂礫層が発達し、小規模な扇状地を形成する。旧国郡の筑前国御笠郡にあたる。

2. 歴史的環境

旧石器時代

市域では釜蓋原遺跡・雉子ヶ尾遺跡・松葉園遺跡・出口遺跡・横峯遺跡・本堂遺跡群など丘陵上の遺跡でナイフ型石器・細石刃などの遺物が確認されている。周辺地域では南八幡遺跡・諸岡遺跡・諸岡城館遺跡・井尻B遺跡・門田遺跡などで後期旧石器時代に属する遺物が出土している。

縄文時代

市域で草創期の遺構・遺物は確認されていないが、周辺では門田遺跡で爪形文土器が出土している。早期になると遺跡の数が増加し、釜蓋原遺跡・雉子ヶ尾遺跡・本堂遺跡群などの丘陵地で押型文土器や石器が確認されているほか、石勺遺跡など平野の微高地上にも遺跡が展開する。なお石勺遺跡ではおとし穴状遺構が検出されている。前期～中期の遺跡は市域では確認されておらず、周辺地域でも遺跡の数が増加する。後期の遺跡は牛頸塚原遺跡・日ノ浦遺跡で後期後半・末～晩期にかけての竪穴住居・土坑が確認されている。また、牛頸川の河床で前期と考えられる珧状耳飾が採集されている。

弥生時代

弥生時代に入ると福岡平野全域で遺跡が増加し、沖積地にも遺跡が展開する。前期の遺跡は、市域では北部の丘陵・平野部に多く、特に墳墓遺跡は北部の丘陵地に集中する。御陵前ノ楡遺跡（前期中頃）・中・寺尾遺跡（前期中頃～中期）・塚口遺跡（前期後半～末）で甕棺墓・土壇墓・木棺墓などが営まれる。南部では牛頸日ノ浦遺跡で前期後半の甕棺墓・土壇墓がある。集落遺跡は多くないが、仲島遺跡・石勺遺跡・ヒケシマ遺跡は前期末頃に出現し、中期に継続する集落である。丘陵部では御陵遺跡で前期中頃～末の集落が確認されている。また川原遺跡では板付Ⅰ式期にさかのぼる集落が確認されている。周辺では、板付遺跡や那珂遺跡で早・前期の環濠集落が成立し拠点集落

となる。また板付遺跡に隣接する諸岡遺跡では朝鮮系無文土器が多数出土しており、渡来系集落と位置づけられる。前期末～中期初頭段階の北部九州地域では、吉武高木遺跡や板付田端遺跡のように青銅器を多数保有する墳墓が出現しており、各地にクニが成立すると考えられている。中期の遺跡として、市域では平野部の仲島遺跡・石勺遺跡・ヒケンマ遺跡が、前期末から中期を通して継続する集落である。丘陵地でも北部の中・寺尾遺跡・森園遺跡で中期前半～後半に集落が展開し、南部でも本堂遺跡群で小規模な集落がある。墳墓遺跡としては前期から継続する中・寺尾遺跡があるほか、森園遺跡で中期後半を中心にした甕棺墓群がある。周辺では春日丘陵に大規模な集落・墳墓が出現し、青銅器生産も開始される。特に須玖岡本遺跡D地点甕棺は約30面の前漢鏡・ガラス璧・多数の青銅器を副葬し「王墓」と称されており、当該期の春日丘陵は『魏志倭人伝』に記された「奴国」の中心的地域と位置づけられる。後期に入ると仲島遺跡・石勺遺跡・中・寺尾遺跡・森園遺跡・松葉園遺跡・本堂遺跡群などで集落の展開がみられるほか、村下遺跡・榎町遺跡で新たな集落が出現する。このうち仲島遺跡では貨布・銅鏡片・青銅製鋤先・銅鏃・青銅器鑄型などが出土しており拠点集落と位置づけられる。周辺では中期以降春日丘陵一帯や那珂・比恵遺跡群が拠点集落として継続し、雀居遺跡では環濠集落が成立する。

古墳時代

前期

〔墳墓〕古墳時代になると福岡平野でも前方後円墳が出現し、那珂川流域を中心に首長墓級の前方後円墳が分布する。福岡平野最古式の前方後円墳として、三角縁神獣鏡が出土した那珂八幡古墳があり、このほか、須玖御陵古墳や前方後方墳で三角縁神獣鏡を副葬する妙法寺2号墳がある。これに後続する盟主墳として安徳大塚古墳や三角縁神獣鏡が出土したとされる卯内尺古墳がある。市域において前方後円墳は確認されていないが、御陵古墳群周辺で三角縁神獣鏡が出土しており、有力な在地勢力が存在したと考えられている。

〔集落〕福岡平野の拠点集落としては、博多湾沿岸の西新町遺跡・博多遺跡群や那珂・比恵遺跡群があり大規模な集落が展開する。市域では仲島遺跡・石勺遺跡・村下遺跡が弥生時代後期から継続し、瑞穂遺跡・原ノ畑遺跡などでも集落が出現する。この他、森園遺跡や本堂遺跡群でも再び集落の形成が認められる。

中期

〔墳墓〕5世紀代では、初期横穴式石室を導入した老司古墳があり、博多遺跡群でも博多1号墳が築造される。また剣塚北古墳・井尻B1号墳・野藤1号墳・貝徳寺古墳など中規模の前方後円墳・円墳が築造される。市域では5世紀前半の笹原古墳があり、太宰府市域であるが、笹原古墳に隣接して5世紀後半の成屋形古墳が築造され、御笠川流域の盟主墳と考えられている。また5世紀後半には観音山古墳群・カクチガ浦古墳群や市域南部の牛頸塚原古墳群など古式群集墳の形成が認められる。

〔集落〕5世紀代の集落遺跡は非常に希薄で、前代までの拠点集落である那珂・比恵遺跡群や西新町遺跡は消滅する。周辺では井相田C遺跡・高畑遺跡・立花寺B遺跡などで集落が展開する。市域では中・寺尾遺跡・森園遺跡・上園遺跡・仲島遺跡で散発的に集落が形成される。



- | | |
|----------------|---------------------|
| 1. 大野城跡 | 77. 森園遺跡 |
| 2. 水城跡 | 78. ヒケシマ遺跡 |
| 宇美町 | 79. 中・寺尾遺跡 |
| 3. 岩長浦古墳群 | 80. 薬師の森遺跡 |
| 4. 観音浦古墳群 | 81. 銀山遺跡 |
| 5. 正籠古墳群 | 82. 原門遺跡 |
| 6. 湯湧古墳群 | 83. 雄子ヶ尾遺跡 |
| 7. 花ノ木古墳群 | 84. 雄子ヶ尾遺跡 |
| 8. 内野谷古墳群 | 85. 雄子ヶ尾古墳 |
| 志免町 | 86. 釜蓋原古墳群 |
| 9. 桜ヶ丘古墳群 | 87. 笹原古墳 |
| 福岡市 | 88. 金山遺跡 |
| 10. 七曲古墳群 | 89. 釜蓋原遺跡 |
| 11. 金剛山古墳群 | 90. 仲島遺跡 |
| 12. 持田ヶ浦古墳群A群 | 91. 仲島本間尺遺跡 |
| 13. 持田ヶ浦古墳群B群 | 92. 川原遺跡 |
| 14. 持田ヶ浦古墳群C群 | 93. 御笠の森遺跡 |
| 15. 持田ヶ浦古墳群D群 | 94. 村下遺跡 |
| 16. 持田ヶ浦古墳群E群 | 95. 宝松遺跡 |
| 17. 持田ヶ浦古墳群F群 | 96. 雄駒原遺跡 |
| 18. 今里不動古墳 | 97. 石ノ遺跡 |
| 19. 幾ヶ浦古墳群 | 98. 原ノ畑遺跡 |
| 20. 影ヶ浦古墳群 | 99. 後原遺跡 |
| 21. 丸山古墳 | 100. 御供田遺跡 |
| 22. 金隈遺跡群 | 101. 瑞穂遺跡 |
| 23. 立花寺遺跡群 | 102. 国分田遺跡 |
| 24. 立花寺B遺跡群 | 103. ハザノ遺跡 |
| 25. 井相田D遺跡群 | 104. 谷川遺跡 |
| 26. 井相田C遺跡群 | 105. 出口遺跡・遺跡 |
| 27. 板付遺跡 | 106. 上園遺跡 |
| 28. 高畑遺跡 | 107. 本堂遺跡群 |
| 29. 荻野A遺跡 | 108. 梅頭遺跡群 |
| 30. 荻野B遺跡 | 春日市 |
| 31. 荻野C遺跡 | 109. 駿河A遺跡 |
| 32. 南八幡遺跡群 | 110. 駿河B遺跡 |
| 33. 雄駒原遺跡群 | 111. 駿河D遺跡 |
| 34. 三筑遺跡 | 112. 駿河E遺跡 |
| 35. 笹原遺跡群 | 113. 原ノ口遺跡 |
| 36. 諸岡B遺跡 | 114. 先ノ原B遺跡 |
| 37. 諸岡A遺跡 | 115. 立石遺跡 |
| 38. 比恵・那珂遺跡群 | 116. 須玖岡本遺跡 |
| 39. 五十川遺跡群 | 117. 須玖坂本B遺跡 |
| 40. 井尻B遺跡 | 118. 須玖五反田遺跡 |
| 41. 井尻B-1号古墳 | 119. 須玖永田遺跡 |
| 42. 寺島遺跡 | 120. 須玖尾花町遺跡 |
| 43. 笠拔遺跡 | 121. 上平田・天田遺跡 |
| 44. 弥永原遺跡群 | 122. 赤井手遺跡 |
| 太宰府市 | 123. 竹ヶ本遺跡 |
| 45. 成屋形遺跡群 | 124. 伯文社遺跡 |
| 46. 成屋形古墳群 | 125. 大南B遺跡 |
| 47. 表ノ田遺跡 | 126. 宮の下遺跡 |
| 48. 表ノ田古墳 | 127. 大南遺跡 |
| 49. 表ノ田遺跡 | 128. 大谷遺跡 |
| 50. 陣の尾古墳群・遺跡群 | 129. 御陵遺跡群・古墳群 |
| 51. 筑前国分尼寺跡 | 130. 野藤1号墳 |
| 52. 国分松本遺跡 | 131. 下白水大塚古墳 |
| 53. 筑前国分寺跡 | 132. 日坪塚古墳 |
| 54. 国分瓦窯跡 | 133. 辻田遺跡 |
| 55. 御笠印出土地 | 134. 門田遺跡 |
| 56. 大宰府政庁跡 | 135. 天神の木遺跡 |
| 57. 松台瓦窯跡 | 136. 天神山水城跡 |
| 58. 松本瓦窯跡 | 137. ウグチ遺跡群 |
| 59. 采木古墳群・瓦窯跡 | 138. 大土居水城跡 |
| 60. 采木北瓦窯跡 | 139. 小倉水城跡 |
| 61. 都府樓北瓦窯跡 | 140. 大牟田遺跡 |
| 62. 神ノ前窯跡群 | 141. 惣利窯跡群 |
| 大野城市 | 142. 惣利遺跡 |
| 63. 唐山古墳群 | 143. 惣利北遺跡 |
| 64. 乙金北古墳群 | 144. 惣利西遺跡 |
| 65. 唐山遺跡 | 145. 惣利東遺跡 |
| 66. 御陵古墳群 | 146. 春日水城跡 |
| 67. 御陵島古墳 | 147. 向谷北遺跡 |
| 68. 塚口遺跡 | 148. 向谷西遺跡 |
| 69. 御陵前ノ橋遺跡 | 149. 向谷遺跡 |
| 70. 善一田古墳群 | 150. 向谷古墳群 |
| 71. 王城山古墳群 | 151. 向谷南遺跡 |
| 72. 古野古墳群 | 152. 春日平田北遺跡 |
| 73. 原口古墳群 | 153. 春日平田遺跡 |
| 74. 乙金窯跡 | 154. 九州大学筑紫キャンパス遺跡群 |
| 75. 此岡古墳群 | 155. 先ノ原・春日公園内遺跡 |
| 76. 松葉園遺跡 | |

第4図 周辺遺跡分布図

後期

〔墳墓〕 6世紀前半の首長墓として赤井出古墳があり、これに続き6世紀中頃の東光寺剣塚古墳・日拝塚古墳といった前方後円墳がある。特に東光寺剣塚古墳は石屋形・複室両袖型横穴式石室を採用しており、八女地域・肥後北部地域との関係が指摘されている。6世紀後半には上白水天神山古墳・下白水大塚古墳などの中規模前方後円墳が築造されるが、大型前方後円墳は姿を消す。大野城市と福岡市博多区の境界に位置する今里不動古墳は直径30mの円墳であり、御笠川右岸地域の盟主墳と考えられる。前方後円墳の終焉にかわって6世紀後半以降、福岡平野一帯の丘陵上には直径10mほどの小円墳を主体とした群集墳が爆発的に増加する。市域においては月隈丘陵から乙金山・四王寺山にかけての丘陵上に大規模な群集墳が営まれる。また市域南部では須恵器工人の墓と考えられる牛頸中通・後田・小田浦古墳群などがあるほか、梅頭窯跡では窯を転用した墳墓から象嵌太刀が出土しており注目できる。これらの群集墳は6世紀後半～7世紀前半頃にかけて築造が認められ、7・8世紀代を通じて追葬が行われる。

〔集落〕 5世紀代に希薄であった集落遺跡は、6世紀中頃以降、福岡平野の各地で再び増加する。特に比恵遺跡群では6世紀後半に大型建物群が出現し、「那津官家」の可能性が指摘される。市域では仲島遺跡や塚原遺跡群・日ノ浦遺跡群・上園遺跡などで集落が展開する。特に仲島遺跡では移動式カマド・滑石製模造品・馬骨などが出土しており、隣接する井相田C遺跡では竪穴住居や掘立柱建物が多数検出されていることから、拠点的な集落があったと考えられる。仲島遺跡や中・西コモリ遺跡(森園遺跡の一部)では滑石製品の未製品やチップが出土し、滑石工房の存在が指摘される。

また牛頸窯跡群は6世紀中頃から操業を開始し、以後規模を拡大していく。一方、乙金地区においても6世紀後半を中心に乙金窯跡・雉子ヶ尾窯跡・裏ノ田窯跡などが操業するが、いずれも小規模なものである。

飛鳥時代

7世紀前半代は集落・墳墓ともに古墳時代の様相を踏襲する。6世紀後半に比恵遺跡群でみられた大型建物群は那珂遺跡群に移動する。この時期牛頸窯跡群の須恵器生産はひとつのピークを迎える。また野添遺跡群や月ノ浦窯跡などでは初期瓦を生産しており、那津官家比定地の那珂遺跡に供給されたことが知られる。牛頸窯跡群内の牛頸塚原遺跡・日ノ浦遺跡・上園遺跡・梅頭遺跡・惣利西遺跡などは須恵器工人集落と考えられている。

7世紀後半になると朝鮮半島三国間で争いがおこり、唐の介入もあって東アジア全体が動乱の時代をむかえる。その結果、日本も白村江の戦(663年)で敗戦を経験し、日本史上初の国際的な危機に直面する。これに伴い664～665年にかけて水城・大野城が相次いで築造される。国内情勢でも壬申の乱(672年)が起こり、これを機に律令体制に基づく本格的な中央集権国家を形成していくことになる。また当該期には大宰府第Ⅰ期政庁が成立する。牛頸窯跡群では供膳具を大量生産しており、権状製品や円面硯などが出土することから、大宰府にむけた生産をおこなっていたと考えられている。

奈良時代

奈良時代になると律令国家が成立し、九州も大宰府を中心とした支配体制が整い、各地に官衙が

設置される。またこの時期には官道も整備され、井相田C遺跡・板付遺跡・那珂久平遺跡（水城東門ルート）や谷川遺跡・先の原遺跡・春日公園内遺跡（水城西門ルート）などで道路状遺構が確認されている。集落遺跡として市域では仲島遺跡や隣接する井相田C遺跡で掘立柱建物を中心とした遺構が確認されており、公的施設が存在したと考えられる。また御笠の森遺跡では石帯(丸軋)が出土しており注目できる。周辺の高畑遺跡は「高畑廃寺」あるいは那珂郡衙の可能性が指摘され、麦野遺跡・南八幡遺跡では大規模な村落が成立する。このように御笠川中流域の官道沿いに官衙や村落が展開している様子が窺える。墳墓の検出例は少ないが、石勺遺跡で火葬墓が確認されている。牛頸窯跡群では8世紀前半に窯の数が増加し、8世紀後半には甕の生産が認められず、8世紀代を通じて供膳具を中心に大量生産がおこなわれる。この他、本堂遺跡群では村落内寺院と考えられる遺構が確認されている。

平安時代

平安時代前半の9・10世紀代は福岡平野全域で遺跡数が減少し、大宰府でも遺構・遺物量が減少する。牛頸窯跡群も規模が縮小し、9世紀中頃には操業を停止する。市域の遺跡も減少し、集落では日ノ浦遺跡で9世紀中頃までの遺構は確認できるが、これを最後に姿を消す。また前代に見られた仲島遺跡・井相田C遺跡や麦野遺跡の集落も9世紀代に消滅する。9～10世紀代の墳墓遺跡としては牛頸月ノ浦窯跡・本堂遺跡群・塚口遺跡・中・寺尾遺跡で土壇墓があり、持田ヶ浦古墳群ではマウンドを伴う塚状の遺構が確認されている。また胴ノ元古墳・中通古墳で横穴式石室を再利用した例がある。なお9世紀前半に改称した鴻臚館は対外交渉の窓口として機能し、9世紀後半以降は中国商人の滞在・交易施設となり、初期貿易陶磁器が大量に出土している。

平安時代後半になると、11世紀中頃～後半に大宰府政庁・鴻臚館が廃絶し、かわって博多遺跡群において中世都市「博多」が成立する。律令制は完全に崩壊し、各地で武士が活躍する時代を迎える。市域においては塚口遺跡・森園遺跡・中・西コモリ遺跡・松葉園遺跡・薬師の森遺跡第2次調査で、輸入陶磁器を埋納する土葬墓が確認されており、有力者の存在を示す。集落は薬師の森遺跡・松葉園遺跡・御笠の森遺跡・上園遺跡で確認されており、本堂遺跡群では「大日如来」銘の墨書土器や木製形代などの祭祀遺物が出土している。また小水城周辺遺跡では掘立柱建物・溝などが検出されており、小水城が防衛施設として機能していないことを示す。

薬師の森遺跡第3次調査

Ⅲ．薬師の森遺跡第3次調査

A．調査概要

調査地は事業地南側にあたり、大野城市乙金3丁目187番地ほか（小字：毛所）に所在する。調査面積は約400㎡である。調査地は四王寺山から西側にむかって派生する丘陵の南側裾部にあたり、南にむかって緩やかに下っていく地形となる。調査地は畑、調査地南側は栗林として利用されていたが、旧地形図によると、昭和30年代頃は調査地全体が畑であったようである。調査区の東側には山目池があり、地元の人の話によると以前は調査地の南側まで池があったようで、昭和期に埋め立てたとのことであった。そのため調査地南側は大きく削平されており、旧地形はまったく残っていないが、本来は緩斜面がさらに南側まで展開していたようである。また調査区の北側は急斜面となっており、表土を剥ぐと花崗岩パイラン土が露出することや、斜面と接する部分に狭い平坦部があり、この部分に近現代と考えられる畑の痕跡があることから、一部耕作等により削平されているものと判断した。平成20年2月14日から重機による表土の除去を開始し、遺構面を検出した。表



第5図 薬師の森遺跡第3次調査遺構配置図 (1 / 200)

土の下には耕作土と考えられる黒褐色土があり、黒褐色土を除去すると、花崗岩バイラン土および花崗岩バイラン土由来と考えられる黄褐色～明褐色土があらわれたため、この面を遺構検出面と認定した。2月20日から作業員・機材を投入して調査を開始し、人力による遺構掘削と平行して、写真・測量により記録をおこなった。3月31日に全ての遺構の掘削・記録を終了し、機材を撤収して調査を完了した。また4月12日には現地説明会を開催し、地元の方をはじめ約100名の来跡があった。

調査の結果、掘立柱建物2棟、竪穴住居1軒、おとし穴状遺構1基、須恵器窯跡に関連する土坑1基、木棺墓1基のほか、土坑・ピットを確認した。調査区の南北は削平を受けるものの、その他の部分の遺構残存状況は比較的良好であった。遺構密度は高くないが、各時代の多様な遺構を確認した。遺物は須恵器・土師器・縄文土器・青磁・石製品・鉄製品などが出土した。

B. 遺構と遺物

(1) 掘立柱建物

SB01 (第6図・図版2)

調査区中央南側の緩斜面に位置し、SC01を切る。主軸は略東西方向で、南北2間(梁行3.2m)、東西3間(桁行5.14m)の規模である。南側の柱列は谷により削られており、柱穴の一部は消滅している。柱穴は径0.3～0.5mの円形・隅丸方形プランを呈する。柱穴底面の標高は南側ほど低くなっており、地形に対応しているものと考ええる。柱痕を確認できたものは、直径15cmを測る。柱穴から少量の須恵器・土師器が出土した。

出土遺物 (第7図)

須恵器(1・2) 1・2は杯H身である。いずれも立ち上がりは低く内傾し、内外面ともに回転ナデを施す。1の外面には自然釉が付着する。

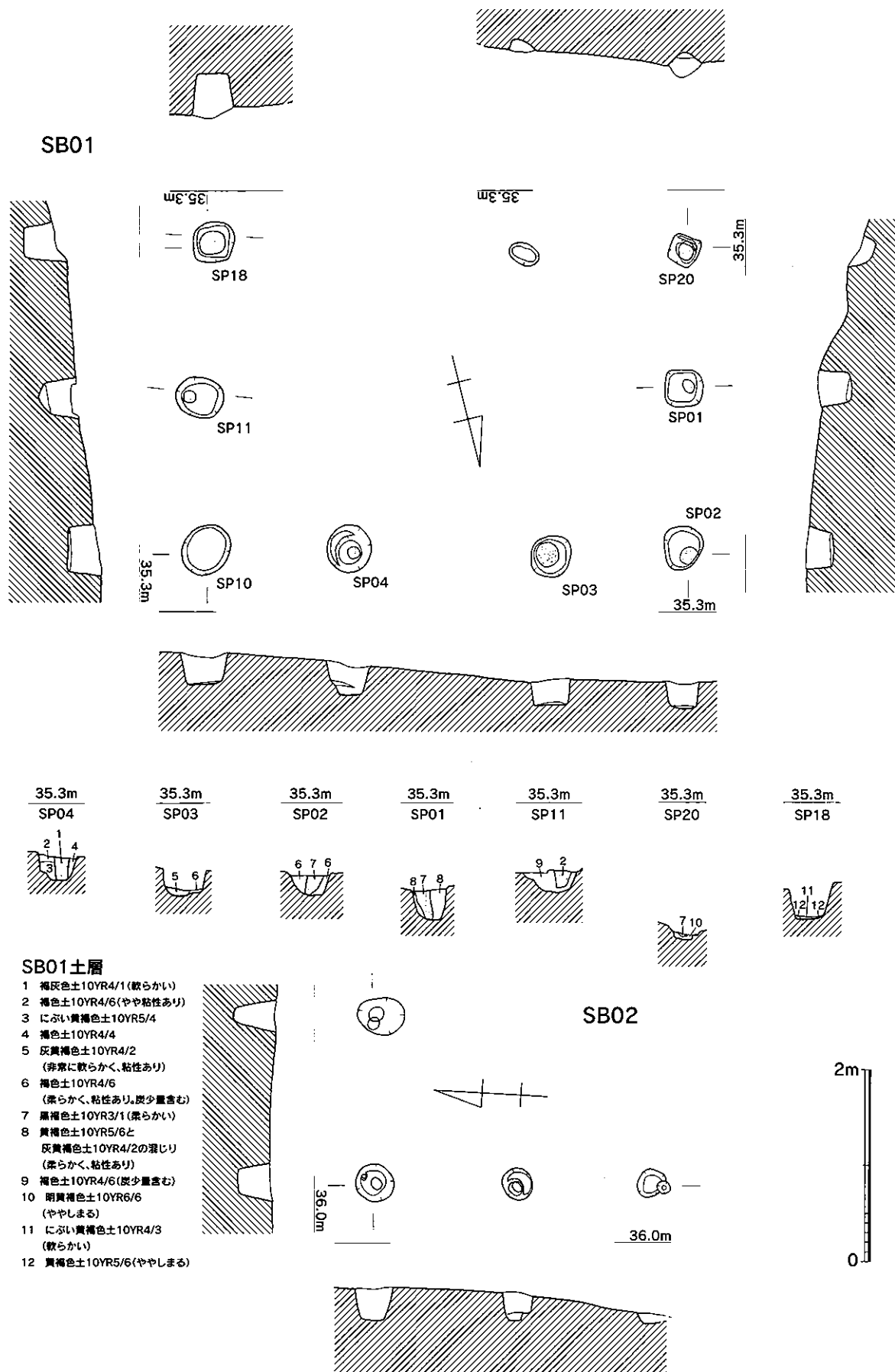
SB02 (第6図・図版2)

調査区中央部に位置し、SX14を切る。主軸は略南北方向で、南東側の柱穴は確認できなかったが、削平された可能性がある。現状で東西1間(梁行1.6m)、南北2間(桁行2.9m)の掘立柱建物と考える。柱穴は0.3～0.5mの円形プランを呈する。柱痕は直径10～12cmを測る。遺物は土師器片が出土したが細片のため図化できない。

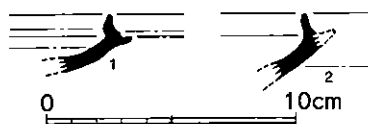
(2) 竪穴住居跡

SC01 (第8図・図版3～5)

調査区中央南側で検出した竪穴住居である。南側は大きく削平され、SB01に切られる。規模は北壁で4.92mを測り、カマドや支柱穴との位置関係から5m四方の方形プランを呈すると考える。深さは最深部で0.4mである。埋土は明褐色・黄褐色土を主体とし、全体的に自然堆積した状況を示す。また最上層からはSX09からの流れ込みと考えられる焼台や炭化物が出土しており、SX09が営まれた時期には窪地になっていたと考えられる。床面は平坦で、北壁・西壁には壁溝が巡り、壁溝の深さは数cm～15cmである。支柱穴は3ヶ所確認したが本来は4本柱の住居と考える。柱穴は長さ0.4～0.5mの楕円形で、柱痕は直径15～20cmを測る。貼床は認められなかったが、



第6図 薬師の森遺跡第3次調査SB01・02実測図 (1 / 60)



第7図 薬師の森遺跡第3次調査
SB01出土遺物実測図
(1/3)

西壁側中央に硬化面が形成されている。カマドは東壁中央に設置されており、暗褐色粘質土で袖を構築し、両袖間には石製支脚が残る。袖は壁面から50cmほど住居内に突出し、基底部幅は30～35cmを測る。支脚の西側は直径20cmほどの浅いくぼみがあり、焼土層が薄く堆積する。またカマド内にはカマド

袖の構築土とよく似た暗褐色土・黒褐色土があり、支脚の上端を覆うように焼土層が形成される。遺物は土師器・須恵器・カマド支脚などが出土した。

出土遺物 (第9図・図版15)

須恵器 (3～18) 3～9は杯H蓋である。3は復元口径14.0cmを測り、口縁部回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ、内面ナデを施す。4は器高がやや高く、口縁部回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ、内面ナデを施し、天井部外面にヘラ記号を有する。5～9は口縁部の小片で、いずれも回転ナデを施し、5の天井部外面は回転ヘラケズリを施す。10～14は杯H身である。10は口径11.4(受部径13.6)cmを測る。口縁部の立ち上がりはやや低く内傾する。口縁部回転ナデ、外面回転ヘラケズリ、内面ナデを施し、体部外面にヘラ記号を有す。11は口径11.6(受部径14.5)cmを測る。口縁部の立ち上がりは内傾するがやや高い。口縁部と内面は回転ナデ、外面回転ヘラケズリ、底部内面はナデを施し、外面にヘラ記号を有す。また底部内面には同心円文当具痕が残る。12は口縁部片で復元口径10.4(受部径13.0)cmを測る。口縁部の立ち上がりは低く内傾する。口縁部回転ナデ、外面回転ヘラケズリを施す。体部外面にヘラ記号を有する。13・14は口縁部の小片である。いずれも立ち上がりは低く内傾し、口縁部に回転ナデを施す。15は無蓋高杯の杯部片もしくは碗の口縁部片である。口縁部・内面は回転ナデ、外面回転ヘラケズリを施す。16は高杯の脚部片である。内外面回転ナデを施し、端部は凹線状にくぼむ。17は壺もしくは甕の口縁部片である。内外面回転ナデを施す。18は甕の体部片である。外面は格子目タタキ後粗いカキメを施し、内面は同心円文当具痕が残る。

土師器 (19～24) 甕ないし甔で、19～21は口縁部の破片である。19は内外面摩滅するが、端部はヨコナデを施し凹線状を呈す。20は外面摩滅、内面ナデで、端部は方形を呈す。21は内外面摩滅、端部は丸い。22は頸部片で、外面は胴部に平行タタキ、頸部付根はヨコナデを施し、内面ナデである。23は体部小片で、外面平行タタキ、内面ナデ、24は胴部片で、外面平行タタキ、内面板ナデ・工具痕が残る。

石製品 (25・26) 花崗岩製のカマド支脚で、25はカマド内、26は埋土中より出土した。25は先端を欠損するが、上方がすぼまる角錐形を呈し、残存高16.2cmを測る。表面は被熱のためか風化が著しく、全体に赤味を帯びる。26は比較的形が整った直方体を呈し、高さ19.2cmを測る。表面は著しく風化し、側面はやや赤味を帯びる。

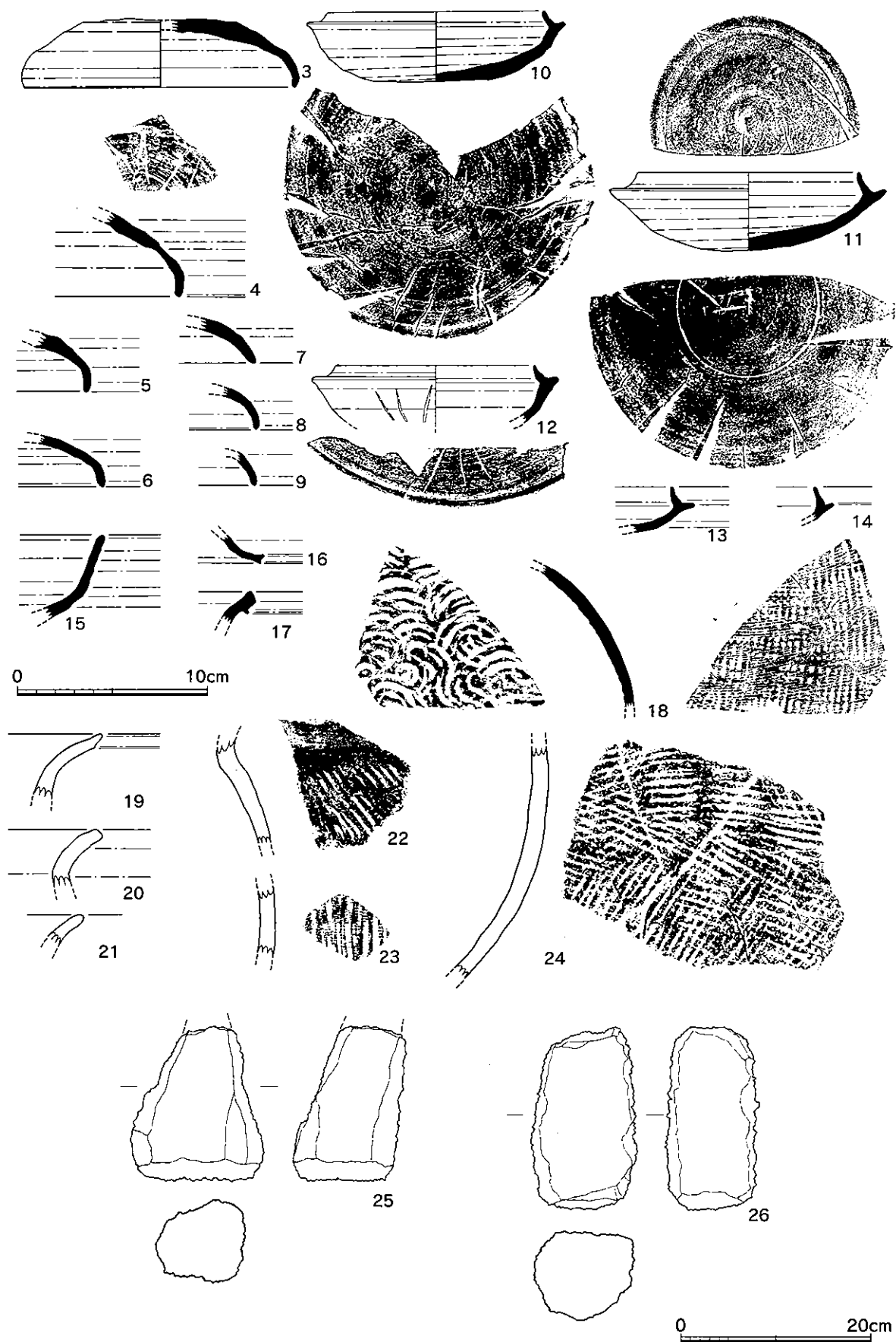
(3) 土坑

SX01 (第10図・図版6・7)

調査区中央北側で検出したおとし穴状遺構である。丘陵部に接する緩斜面に位置し、長軸方向



- 19 -



第9図 薬師の森遺跡第3次調査SC01出土遺物実測図 (25・26は1/6、他は1/3)

杭痕のうち西側2ヶ所は位置や深さから上面ピットに伴う可能性がある。上面ピット完掘後、硬化面を除去したところ、検出面から1.2mほどの深さで底面ピットを検出した。底面ピットは平面隅丸長方形の箱型を呈し、長さ0.47m、幅0.28m、深さ0.15mを測る。また底面ピットの床面で7ヶ所の杭痕跡を確認した。先述した西側の2ヶ所の杭痕は上面ピットに伴う可能性があるが、東側の5ヶ所は底面ピットに伴うものである。以上のことからこの遺構は上面ピット、底面ピットの2時期に渡っておとし穴として利用したと考えられる。なお埋土の最上層から押型文土器と打製石鏃が出土した。

出土遺物（第12図・図版15）

縄文土器（27） 押型文土器鉢の細片で、外面に楕円形押型文を施す。

石器（28） 安山岩製の打製石鏃である。平面三角形の凹基式で、先端を一部欠くが、残存長3.5cm、基部幅2.7cmを測る。

SX02（第11図）

調査区南西に位置する土坑でSX07を切る。大きく削平を受けており、長さ1.2m以上、幅1.06m以上、深さ1.0mを測る。平面楕円形を呈し、壁面は直立気味に立ち上がる。底面の南側に直径0.4mほどのピットがある。埋土はしまりのない黒褐色土が堆積しており、埋土中に散在して土師器、須恵器の細片が出土した。

出土遺物（第12図）

須恵器（29） 高杯脚部片で、内外面ともに回転ナデを施す。脚裾付近は強い回転ナデのため、段を形成する。

SX04（第11図）

調査区南西に位置する土坑でSX07を切る。南側は谷により削られており、長さ3.1m以上、幅1.23m、深さ0.24mを測る。平面プランは長細い楕円形を呈し、壁面は緩やかに立ち上がる。床面北西側で直径0.2mほどのピットがある。埋土は暗灰色土が堆積しており、埋土中から須恵器高杯片・甕片、土師器細片、安山岩剥片が出土した。

出土遺物（第12図）

須恵器（30） 高杯脚部片で、内外面ともに回転ナデを施す。

石器（31） 安山岩製の剥片である。調整痕は認められない。

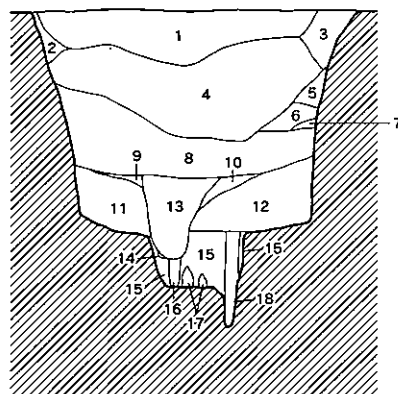
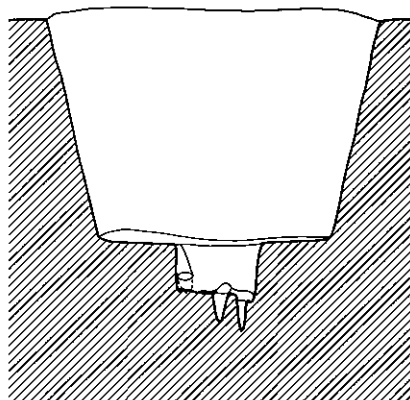
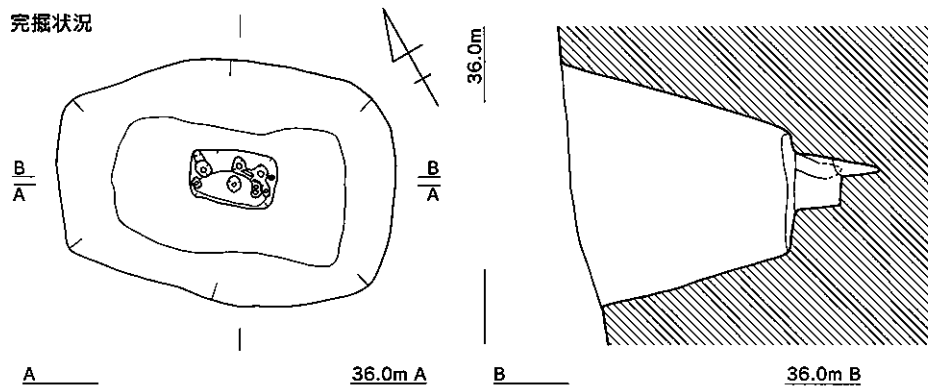
SX06（第11図・図版8）

調査区中央部、SX01の東に位置する土坑である。平面楕円形、断面逆台形を呈し、長さ1.2m、幅0.86m、深さ0.85mを測る。底面は東側にテラスを有する。埋土上層は自然堆積、最下層は短期間に埋没したような状況であった。また最下層中で、拳大の礫が流れ込んだような状態で出土した。検出時の埋土の色・質や主軸方位などがSX01と類似しており、近接した時期の可能性を考えたが、出土遺物がなく時期は不明である。

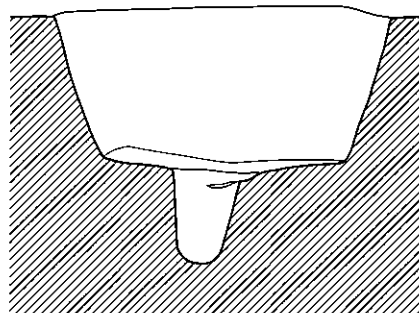
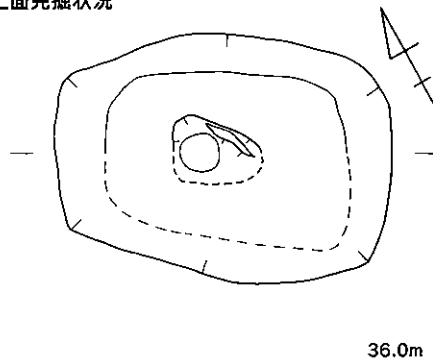
SX07（第11図）

調査区南西に位置する土坑である。SX02に切られるため全形は不明であるが、平面長楕円形を呈するものとする。長さ2.1m以上、幅0.9m以上、深さ0.7mを測る。北側と東側がテラスとなり、

完掘状況



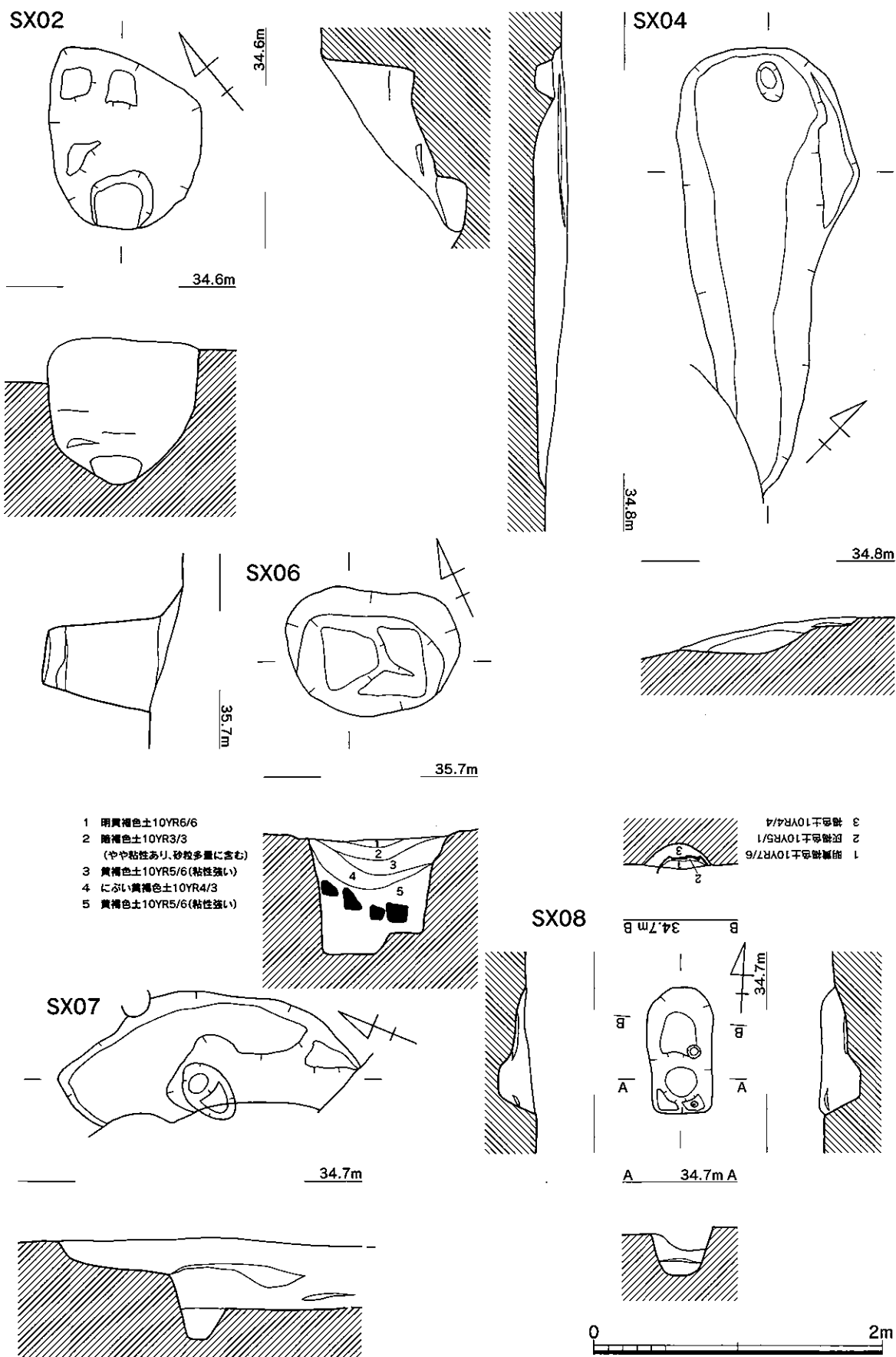
上面完掘状況



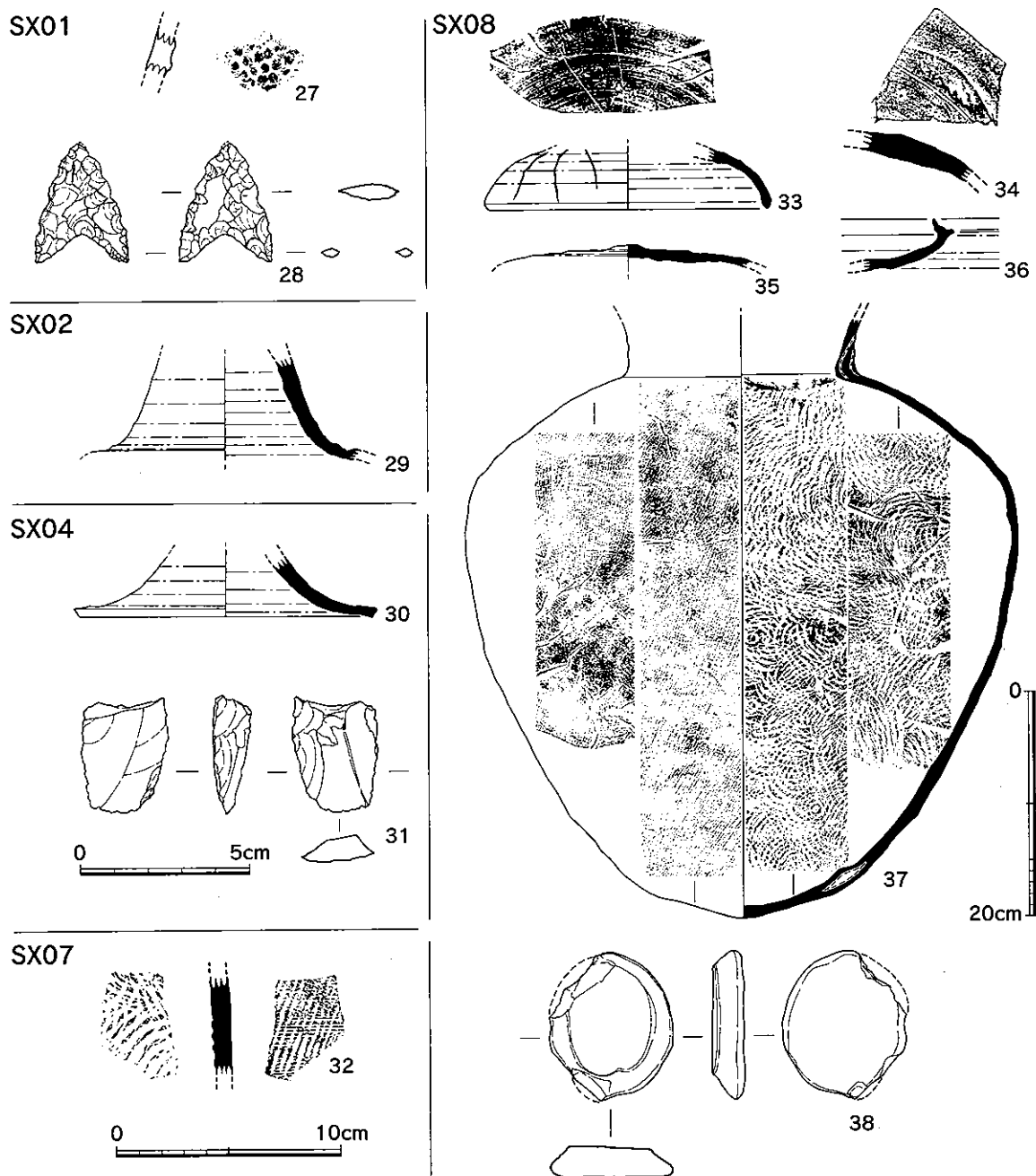
- 1 褐色土7.5YR4/6(非常に硬くしまる)
- 2 黄褐色土10YR5/6(しまりあり)
- 3 2と同じ
- 4 褐色土10YR4/6(9・10と似るが軟らかい。
ザラザラしており、炭化物を少量含む)
- 5 明褐色土7.5YR5/6(よくしまる)
- 6 5と同じだが、しまりなし
- 7 褐色土7.5YR4/6(粘性あるが、しまりなし)
- 8 赤褐色土5YR4/6(粘性あり、しまる)
- 9 にぶい黄褐色粘質土10YR6/4(白味を帯びる)
- 10 9と同じ
- 11 明赤褐色土5YR5/6(しまり強く、硬い)
- 12 11と同じ
- 13 明赤褐色土5YR5/6(にぶい黄褐色土10YR7/4ブロック含む)
- 14 明褐色土7.5YR5/8(粘性強い)
- 15 にぶい黄褐色土10YR7/4(ザラザラしている)
- 16 明褐色土7.5YR5/6(粘性非常に強い)
- 17 褐色土7.5YR6/6(粘性強い)
- 18 赤褐色粘質土5YR4/6(炭少量含む)



第10図 薬師の森遺跡第3次調査SX01実測図 (1 / 40)



第11図 薬師の森遺跡第3次調査SX02・04・06～08実測図 (1 / 40)



第12図 薬師の森遺跡第3次調査SX01・02・04・07・08出土遺物実測図 (37は1/6、28・31・38は1/2、他は1/3)

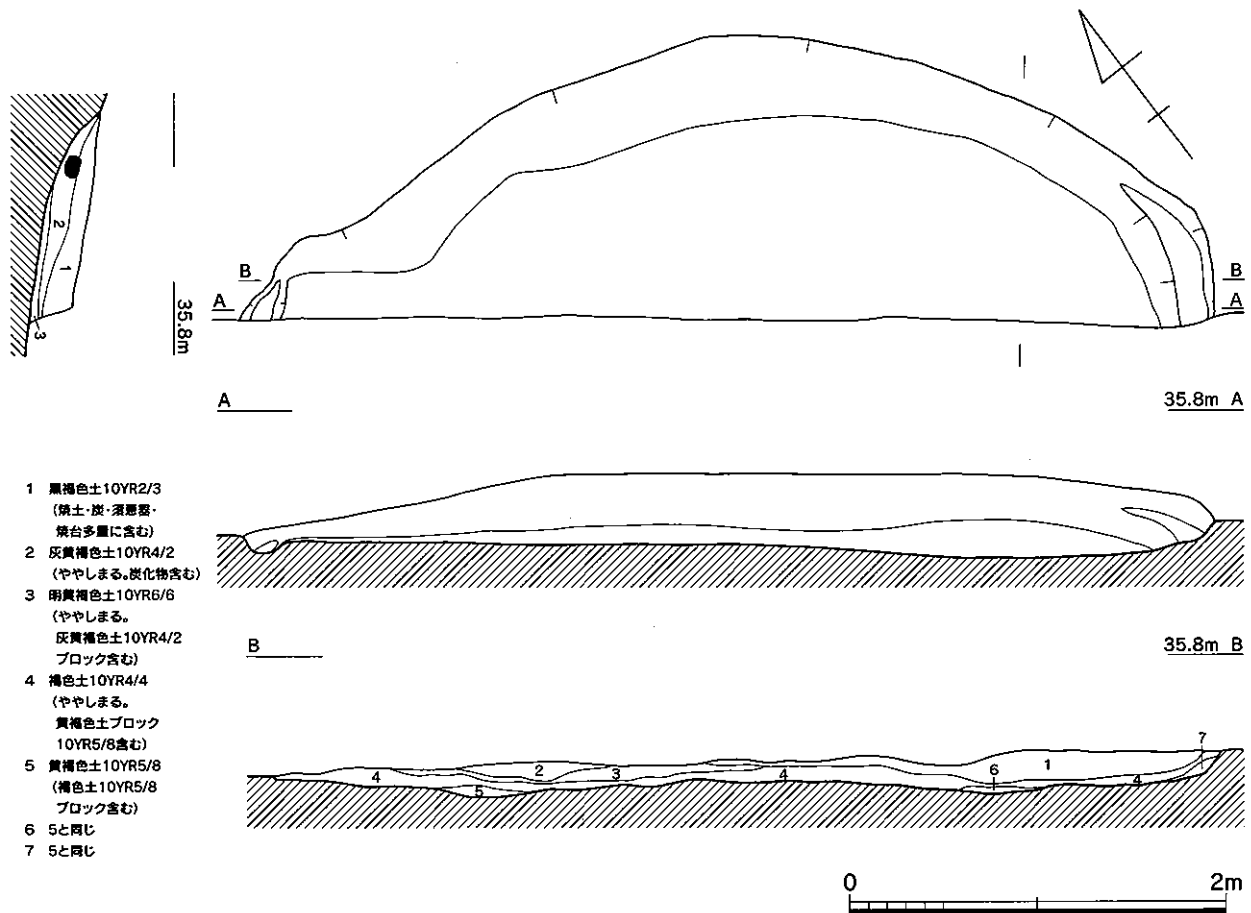
南側が深いため二段掘りとなる。床面の中央に直径0.2mほどの平面楕円形を呈するピットがある。埋土中から須恵器甕片・土師器細片が出土した。

出土遺物 (第12図)

須恵器 (32) 甕の小片で、外面擬格子タタキ後、一部カキメを施す。内面は同心円文当具痕が残る。

SX08 (第11図・図版8)

調査区南西に位置し、平面楕円形を呈す。長さ0.9m、幅0.45m、深さ0.38mを測る。南側はテラス、北側は直径0.2mほどのピット状となり一段深い。埋土上層のテラス部で、須恵器甕が内面を上に向け、縦に半裁されたような状態で出土したほか、須恵器蓋杯が出土した。



第13図 葉師の森遺跡第3次調査SX09実測図 (1 / 40)

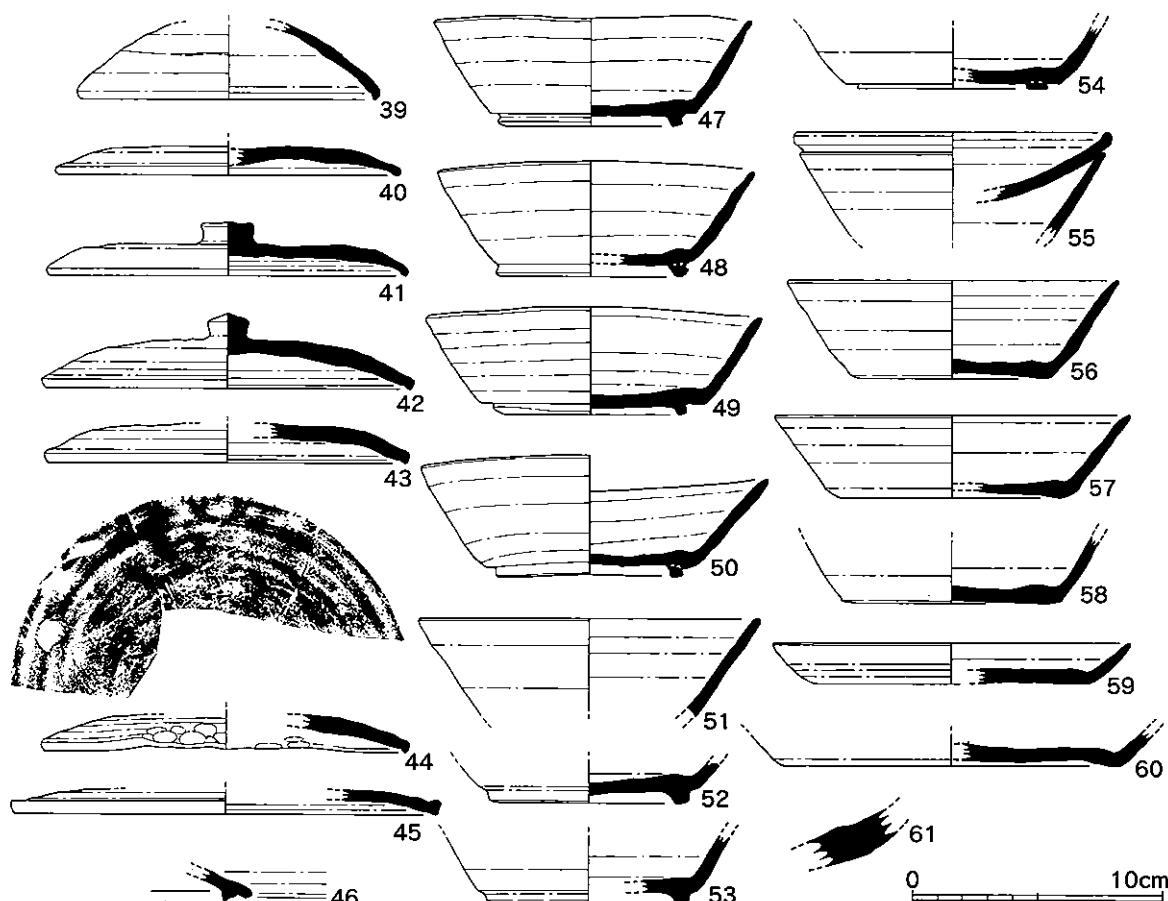
出土遺物 (第12図・図版15)

須恵器 (33～37) 33～35は杯H蓋で、いずれも内外面回転ナデ、天井部外面に回転ヘラケズリを施し、35は天井部内面にナデを施す。33・34は外面にヘラ記号がある。36は杯H身で、内外面ともに回転ナデである。36は中型の甕で残存高52.3cm、胴部最大径49.8cmを測る。外面は全面に擬格子タタキを施し、底部は不定方向に粗く削る。内面は全面に同心円文当具痕が残る。体部を成形した後に、肩部と底部の叩き出しをおこない、体部は当具の中心、底部・肩部は当具縁辺を使用している。頸部は別作りの口頸部を接合しており、内外面ともにナデを施す。

石製品 (38) 38は用途不明の円盤形石製品である。平面楕円形・断面略台形を呈し、表裏面は研磨のため平滑になる。石材は砂岩であろう。

SX09 (第13図・図版9)

調査区中央に位置する平面楕円形の土坑である。遺構南側を試掘トレンチによって破壊してしまったが、長さ5.15m、幅1.53m以上、深さ0.44mを測る。東壁沿いに狭いテラスを有し、底面はほぼ平坦である。埋土は上から黒褐色土、灰黄褐色土、明褐色土が堆積していた。黒褐色土は炭化物や焼土を含んでおり、多量の須恵器のほか焼台や少量の土師器片が出土した。灰黄褐色土中にも少量の須恵器や焼台が出土したが、明褐色土中からは遺物は少量の土師器片が出土したのみである。須恵器の中には焼成不良のものや焼け歪みがあるものもある。埋土の特徴や出土遺物の内容から、



第14図 薬師の森遺跡第3次調査SX09出土遺物実測図（1／3）

当遺構は須恵器の窯跡に関連する遺構と考えられる。

出土遺物（第14図・図版16）

須恵器（39～61） 39～46は杯B蓋である。39はやや器高が高く、天井部は丸みを帯び、40～45は天井部が平坦である。39～44は口縁端部を下方に折り曲げるが、40・41は屈曲が弱く、丸みを帯びる。45の口縁端部は上方に肥厚し、内面の端部付近が沈線状にわずかにくぼむ。45は内面にかえりを有する。41はボタン状、42は宝珠状のつまみを貼り付ける。いずれも口縁部回転ナデ、天井部外面ヘラ切り、内面ナデであるが、41は天井部外面に回転ヘラケズリを施す。また44の口縁部は乾燥時に亀裂が生じたようで、指オサエにより補修している。39は内面に重ね焼きの痕跡がある。47～54は杯B身である。底部が判明する47～50、52～54の高台は低く、底部端のやや内側に貼り付ける。いずれも口縁部～体部は回転ナデ、底部内面はナデである。底部外面は50・54がヘラ切り後未調整、他はヘラ切り後ナデを施す。また50・52の底部内面には重ね焼きの痕跡、53・54の高台部には板状圧痕が残る。55は杯Bの蓋と身が釉着しており、蓋の天地を逆にした状態で焼成されたようである。杯は内外面回転ナデ、蓋は口縁端部を折り曲げるもので、口縁部回転ナデ、内面ナデ、天井部はヘラ切り後ナデを施す。蓋の内面には直径8cmほどの個体を重ね焼きした痕跡があり、杯B身を上に重ねたものと考えられる。56～58は杯である。いずれも口縁部～体部は回転ナデ、底部外面ヘラ切り後ナデで、57・58は底部内面にナデを施し、

底部外面に板状圧痕が残る。59・60は皿で、底部外面ヘラ切り後ナデ、他は回転ナデである。61は小片であるが、壺類の底部であろう。内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリを施す。

SX10 (第17図)

調査区中央北側の平坦部に位置し、SX11に隣接する。平面隅丸長方形を呈し、長さ0.95m、幅0.7m、深さ0.24mを測る。壁面沿いにテラスを有し、中央部が一段低くなる。埋土はしまりのない灰褐色が堆積しており、埋土中から須恵器蓋杯・甕が出土した。

出土遺物 (第18図)

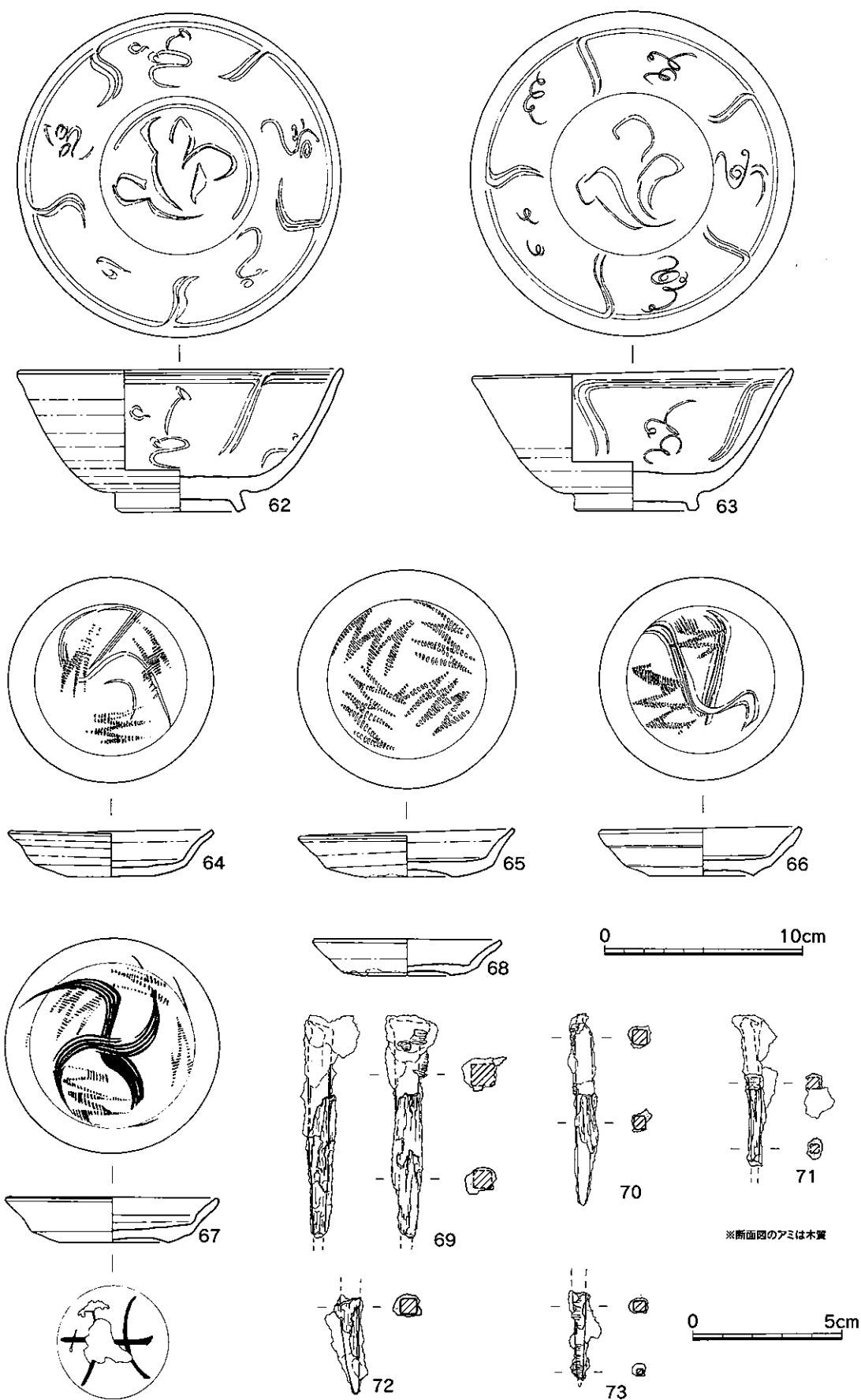
須恵器 (74・75) 74は杯B蓋で、口縁部にかえりを有する。口縁部・内面は回転ナデで、天井部内面はナデを施す。外面は回転ヘラケズリ後、天井部にカキメを施す。75は杯H身である。内面と外面口縁部付近は回転ナデ、底部外面は回転ヘラケズリを施す。外面は灰被りが認められる。

SX11 (第15図・巻頭図版3・図版10・11)

調査区中央北側で検出した木棺墓で、丘陵部に接する平坦部に位置する。墓壇の平面プランは隅丸長方形で、長さ1.8m、幅0.82m、深さ0.26mを測る。底面は平坦で、壁面は垂直気味に立ち上がり、断面逆台形をなす。墓壇主軸はN-15°60'-Eで、略南北方向をとる。遺物は北側底面からわずかに浮いた状態で完形の青磁椀2点・皿5点が出土した。西壁近くでは2点重なった状態の椀と皿1点、中央部では2枚重なった状態の皿二組があり、いずれも正置した状態であった。棺外供献品か棺内副葬品かは判断できなかったが、墓壇底面近くから出土していることや、出土状態に乱れが少ないことから、棺内に副葬されていた可能性が高い。この他鉄釘が北側で3点、南側で2点出土している。埋土は中央部にしまりのない黄褐～褐色土があり、壁面沿いには地山の土に似た黄褐～褐色土が互層状に堆積していた。3～7層は木棺設置時の埋め戻し土、1・2層は棺蓋崩壊後の流入土と考える。また木棺の痕跡は確認できなかったが、鉄釘の出土状態や横断土層から、長さ1.5m、幅0.4～0.5mほどの木棺規模が推定される。頭位方向は遺物の出土状況から北と考えられる。

出土遺物 (第16図・巻頭図版3・図版17・18)

青磁 (62～68) 62・63は龍泉窯系青磁椀Ⅰ-4a類で、いずれも文様・形態・色調や風化具合などの特徴が非常に良く似ている。体部内面・底部見込に片彫りにより施文する。釉は高台畳付けと底部内面以外の全面に施し、オリーブ灰色を呈す。発色は悪く全体に白味を帯び、内外面ともに細かな貫入がある。露胎部分は褐色で、胎土は灰白色である。口縁端部は摩滅しており、一部釉が剥落する。62・63ともに高台の一部を欠損し、破断面は風化する。64～68は同安窯系青磁皿で、64・65・67はⅠ-2b類、66はⅠ-1b類、68はⅠ-1a類である。64～67は内面見込みに片彫り・櫛目により文様を施す。64は全面施釉後、底部外面のみ釉を剥ぎとる。釉は灰オリーブ色、露胎部分は灰色である。口縁端部・体部外面の屈曲部は摩滅しており、一部釉が剥落する。65は全面施釉するが、内面の一部は釉がかかっていない。底部外面は釉剥ぎする。釉はオリーブ灰色、露胎部分は灰白色である。内外面ともに貫入が認められる。66は体部外面下半から底部外面は施釉しない。釉はオリーブ灰色、露胎部分は浅黄色である。67は底部外面のみ露胎となり、他は全面施釉する。釉はオリーブ灰色、露胎部分は灰色であるが一部赤く発色する。底部外面に「卅」に似た墨書があるが、文字か記号かは不明である。口縁端部・体部外面屈曲部は摩滅しており、一部



第16図 薬師の森遺跡第3次調査SX11出土遺物実測図 (69～73は1/2、他は1/3)

釉が剥落する。68は体部外面下半以下が露胎となる。釉はオリーブ灰色、露胎部分は灰黄褐色である。内外面ともに貫入が認められる。口縁端部は摩滅し、一部釉が剥落する。

鉄製品 (69～73) 70は完形品、69・71は先端を一部欠損、ほかは欠損品である。断面は正方形で、69～71の頭部は鉤状に短く折り曲げる。最大幅は69が8mm、他は5～6mm、長さは69が7.8cm(残存長)、70が5.8cmで、2種類の大きさの釘があると考えられる。いずれも木質が遺存し、69～71は木目方向の変化点が頭部上端から2.4～2.7cmのところであり、棺材の厚さは2.5cm前後と推測できる。

SX12 (第17図)

調査区中央部に位置し、SX09に隣接する。平面不整な楕円形を呈し、長さ1.03m、幅0.75m、深さ0.53mを測る。壁面は直立気味に立ち上がり、断面は逆台形を呈する。床面の北側と南側で直径0.1mほどのピットがある。埋土は暗灰色土が堆積しており、埋土中から須恵器甕片、土師器細片が出土した。

出土遺物 (第18図)

須恵器 (77・78) 77・78は甕の破片である。いずれも外面は擬格子タタキ、内面は同心円文当具痕が残り、77の外面はタタキ後ナデを施す。

SX13 (第17図)

調査区中央南側に位置する。南側は大きく削平をされるが、平面楕円形を呈する。長さ1.22m、幅0.9m、深さ0.7mを測る。北側に広いテラスを有し、南側が一段低く、底面は西側が緩やかに低くなる。埋土は黒色土の単層からなり、埋土中から須恵器・土師器の細片が出土した。

出土遺物 (第18図)

須恵器 (76) 杯B蓋の口縁部片で、端部は下方に折り曲げる。内外面ともに回転ナデを施す。

SX14 (第17図)

調査区中央に位置し、SX09に隣接する土坑である。平面隅丸長方形を呈し、長さ1.72m、幅1.37m、深さ0.62mを測る。東側がわずかに高く、狭いテラスとなり、底面の中央に直径0.45m、深さ0.35mのピットがある。また東壁際を中心に直径5～10cmほどの小ピットがあり、土層断面や埋土から判断して杭痕の可能性はある。埋土は粘性の強い黄褐色～褐色の土が堆積しており、埋土中には拳大の礫を多く含んでいた。遺物は出土しなかった。

SX15 (第17図)

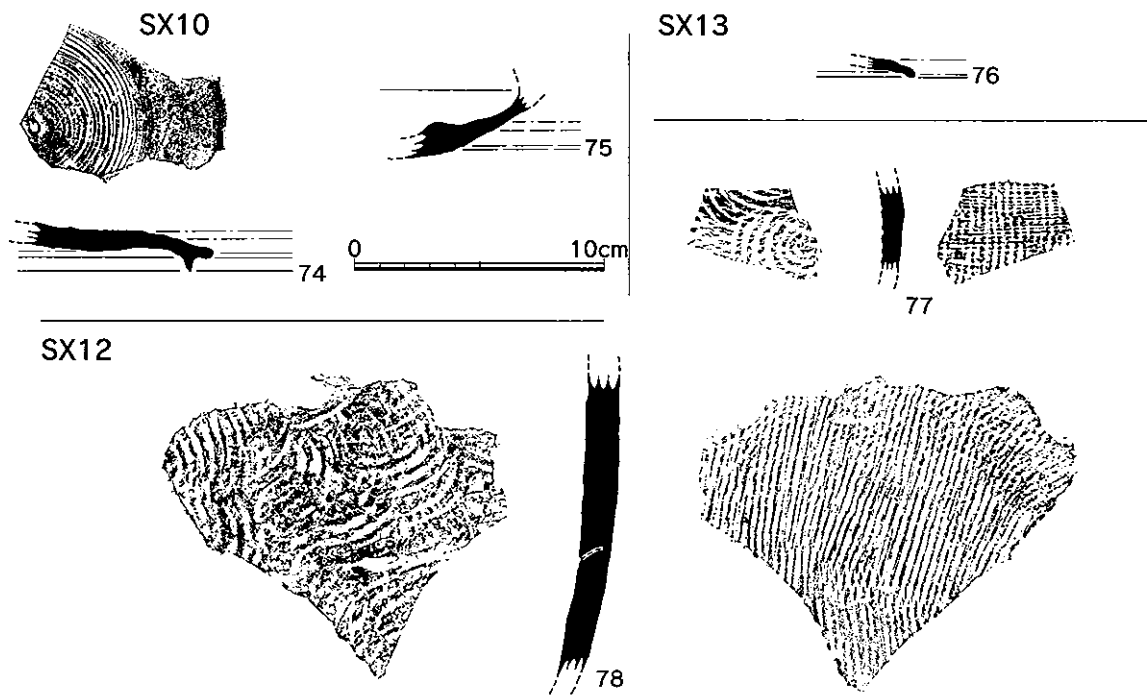
調査区南東部に位置する平面隅丸長方形を呈する土坑である。長さ1.2m、幅0.46m、深さ0.58mを測り、断面は播鉢状を呈する。埋土はしまりのない黒褐色土で、拳大の礫を少量含む。出土遺物は皆無である。

SX16 (第19図)

調査区南東部に位置し、SX17に隣接する。平面楕円形の土坑で、長さ1.35m、幅0.9m、深さ0.47mを測る。埋土は褐色土の単層で、遺物は出土しなかった。

SX17 (第19図)

調査区南東部に位置し、SX16に隣接する。平面略三角形の土坑で、長さ1.4m、幅1.17m、深さ0.63mを測る。北側にテラスを有し、底面は長さ0.86m、幅0.37mの楕円形となる。埋土は褐色土の単層で、遺物は出土しなかった。



第18図 葉師の森遺跡第3次調査SX10・12・13出土遺物実測図（1／3）

SX18（第19図）

調査区南東部隅に位置する。東側は調査区外に展開し、南側は大きく削平されるため、全体のプランは不明であるが、長さ1.45m以上、幅1.1m以上、深さ0.55mを測る。北側はテラスとなり、底面は平坦であるが西側がやや深くなる。埋土は暗灰色土の単層で、埋土中から土師器破片が出土したが、細片のため図化できない。

（4）ピット・その他の出土遺物（第20図・図版18）

SP17出土遺物

須恵器（79） 杯もしくは碗の口縁部片で、内外面回転ナデを施す。

SP21出土遺物

土師器（80） 杯の口縁部片で、器面摩滅のため調整は不明である。

黒色土器（81） A類碗の口縁部片で、器面摩滅のため調整不明であるが、内面黒色を呈す。

SP26出土遺物

土師器（82） 高杯の脚部であろうか。摩滅のため調整は不明である。

SP33出土遺物

土師器（83） 器種不明であるが、内傾する口縁部である。摩滅のため調整不明。

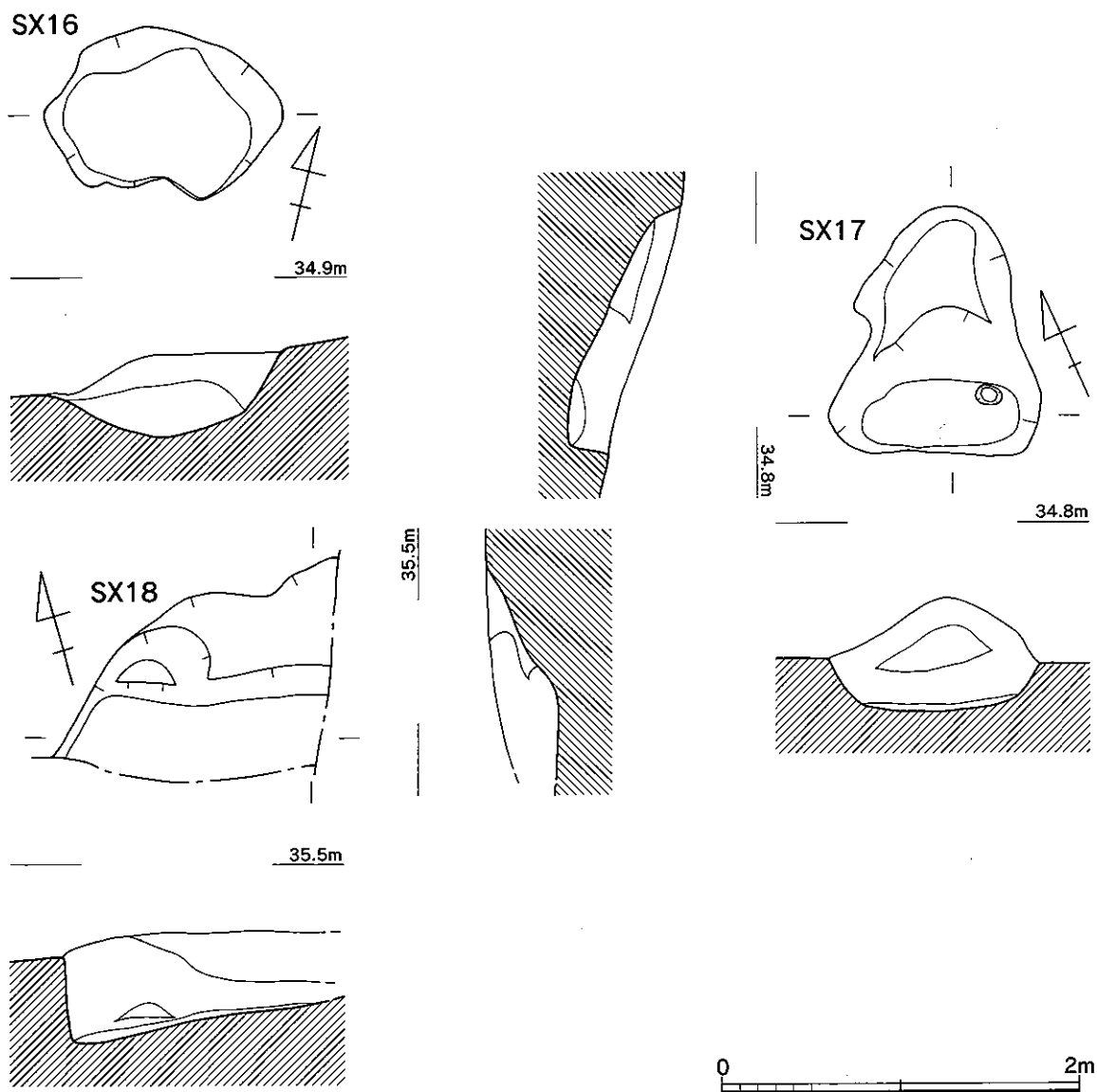
SP39出土遺物

須恵器（84） 杯H蓋の天井部片である。外面回転ヘラケズリ、内面ナデを施す。

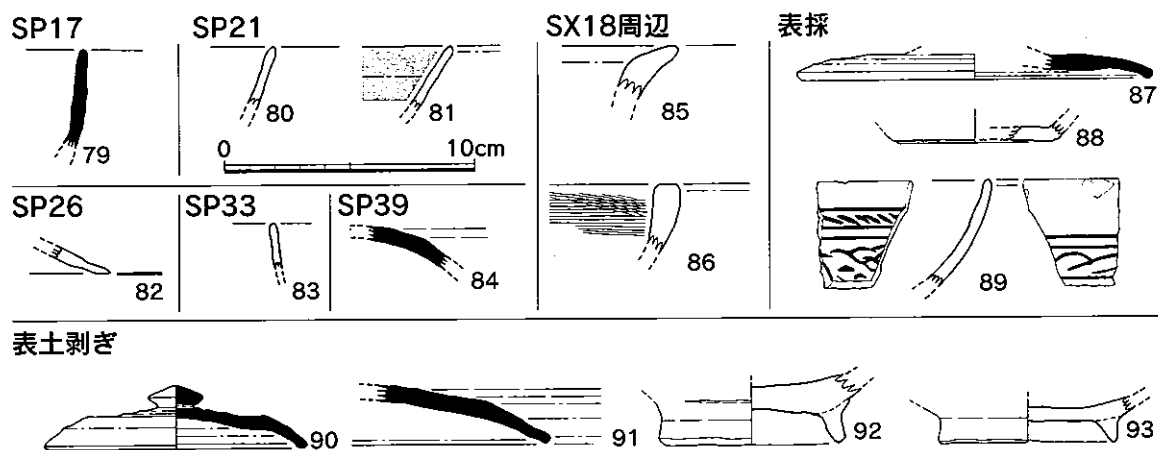
SX18周辺出土遺物

土師器（85） 甕の口縁部片で、緩やかに外反する。器面摩滅のため調整不明である。

土師質土器（86） 鍋の口縁部片で、外面は摩滅、内面と口縁端部にハケメを施す。



第19図 薬師の森遺跡第3次調査SX16～18実測図（1／40）



第20図 薬師の森遺跡第3次調査ピット、その他の出土遺物実測図（1／3）

表採遺物

須恵器 (87) 杯 B 蓋で、口縁端部をわずかに折り曲げる。外面と口縁部は回転ナデ、内面はナデを施す。

土師器 (88) 小皿の底部片で、内面は回転ナデ、外面は摩滅のため調整不明。

青磁 (89) 高麗象嵌青磁碗の口縁部片である。内外面に釉を施し、口縁部付近はにぶい黄褐色、体部は灰色を呈す。胎土は灰色で、白色・黒色粒子をわずかに含む。内外面に白色土を象嵌し、文様を施す。

表土剥ぎ時の遺物

須恵器 (90・91) 90・91は杯 B 蓋で、口縁端部はわずかに折り曲げる。90は擬宝珠形のつまみを貼り付ける。口縁部回転ナデ、内面ナデ、天井部外面は回転ナデ後ナデを施す。91は口縁部回転ナデ、内面ナデ、外面回転ヘラケズリ後ナデを施す。

土師器 (92・93) 92・93は碗の底部片である。92はやや高い高台、93は断面三角形の高台を貼り付ける。いずれも摩滅のため調整不明。

C. 小結

薬師の森遺跡第3次調査は調査面積が狭いにもかかわらず、各時代の遺構を検出した。以下では、主要遺構の時期について述べる。

縄文～弥生時代

最もさかのぼる時期の遺構として、おとし穴状遺構とした SX01があり、遺物は縄文時代早期の押型文土器 1 点、安山岩製石鏃 1 点が出土している。遺物はいずれも最上層からの出土であり、直接遺構に伴うものとは考え難い。また石鏃は全長 3.5cm と大型で、弥生時代の所産である可能性もある。そのため、縄文時代早期にさかのぼる可能性はあるが断定はできず、縄文時代早期～弥生時代までの時期幅で捉えておく。

古墳時代

SB01・SC01がある。SC01は埋土中から須恵器・土師器が出土した。須恵器のうち第9図 10・11はⅢ B 期に位置づけられるが、大半の須恵器はⅣ A 期にあたるため、6世紀末～7世紀初頭頃の遺構と考える。SB01はSC01を切っており、柱穴掘方からⅣ A 期の須恵器が出土している。SC01より後出するが、近接した時期と考える。この他該期の遺構としては SX08がある。

奈良時代

奈良時代の遺構としては SX09があり、出土した須恵器は杯 B が主体である。杯蓋の口縁部は下方に折り曲げるが端部がやや丸みを帯びるものもある。杯身の高台は端部より内側につき、わずかに踏ん張るものがある。以上のことからⅦ B 期（8世紀中頃～後半）に位置づけられる。

平安～鎌倉時代

木棺墓である SX11があり、龍泉窯系青磁碗・同安窯系青磁皿・鉄釘が出土した。龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、同安窯系青磁皿Ⅰ類が出土したことから太宰府編年 XⅣ～XⅤ期（12世紀中頃～後半）の遺構と考えられる。

各遺構の性格や土地利用の変遷については、Ⅴ章で述べる。

雉子ヶ尾遺跡第2次調査

IV. 雉子ヶ尾遺跡第2次調査

A. 調査概要

調査地は事業地南端にあたり、大野城市大字乙金12-4番地ほか（小字：雉子ヶ尾）に所在する。南北にのびる痩せ尾根上に位置し、調査区中央は鞍部となる。標高は50～60m、西側の里道との比高差は5～15mほどで、東側は九州自動車道に接する。調査前は山林であり、旧地形図によると、調査地東側に池があり、池の東には本調査地と同様の痩せ尾根があるが、現存しない。丘陵西側裾部は試掘調査により、遺構がないことを確認したため調査対象外とし、丘陵頂部の約690㎡を調査対象とした。平成20年1月24日から重機により表土を除去し、遺構面を検出した。表土を除去すると、花崗岩パイラン土および花崗岩パイラン土由来の黄褐色土を検出し、この面を遺構検出面と認定した。1月30日に作業員・機材を投入して調査を開始し、人力による遺構掘削と平行して、写真・測量により記録をおこなった。2月7日に全ての遺構の掘削・記録を終了し、機材を撤収して調査を完了した。調査の結果、焼土坑1基・土坑5基・ピットを確認した。遺構密度は非常に薄く、遺物は焼土坑より炭化物が出土したのみである。

B. 遺構

(1) 土坑

SX01（第22図・図版12）

調査区中央鞍部の標高55.5m付近に位置する焼土坑で、長さ2.65m、幅1.75m、深さ0.25mを測り、平面楕円形を呈する。埋土上層のにぶい黄色土層は焼土を含み、南壁・東壁の上部が被熱する。埋土中層の黒褐色土層は少量の焼土と多量の炭化物を含む。炭化物以外に出土遺物はない。

SX02（第22図・図版13）

調査区南側の急斜面に位置する土坑である。平面不整形で、長さ0.84m、幅0.8m、深さ0.32mを測る。北側がテラスとなり、南側がやや深くなる。埋土はしまりのない黄褐色土が堆積する。

SX03（第22図・図版13）

調査区中央にあり、SX01の南東に位置する。東側が調査区外に展開するため全形は不明であるが、平面隅丸長方形を呈する。長さ2.17m以上、幅1.85m、深さ0.73mを測る。西側・南側がテラスとなり、南東側が一段低くなる。埋土はしまりのない黄褐色土が堆積する。

SX04（第23図・図版13）

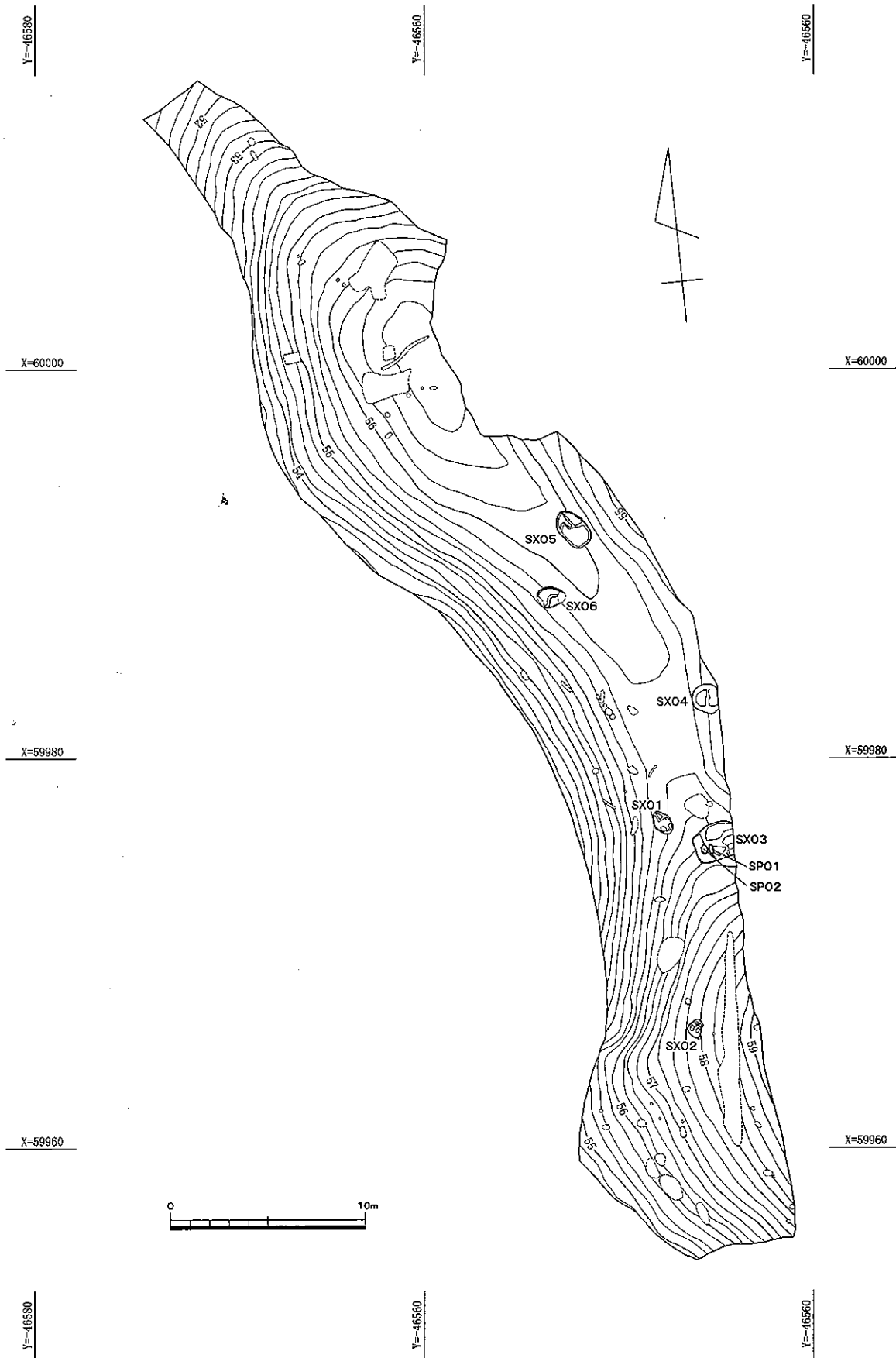
調査区中央鞍部から東に下った斜面に位置する。一部が調査区外に展開するが、平面円形で、長さ1.57m、幅1.35m以上、深さ0.6mを測る。埋土はしまりのない黄褐色土が堆積する。

SX05（第23図・図版14）

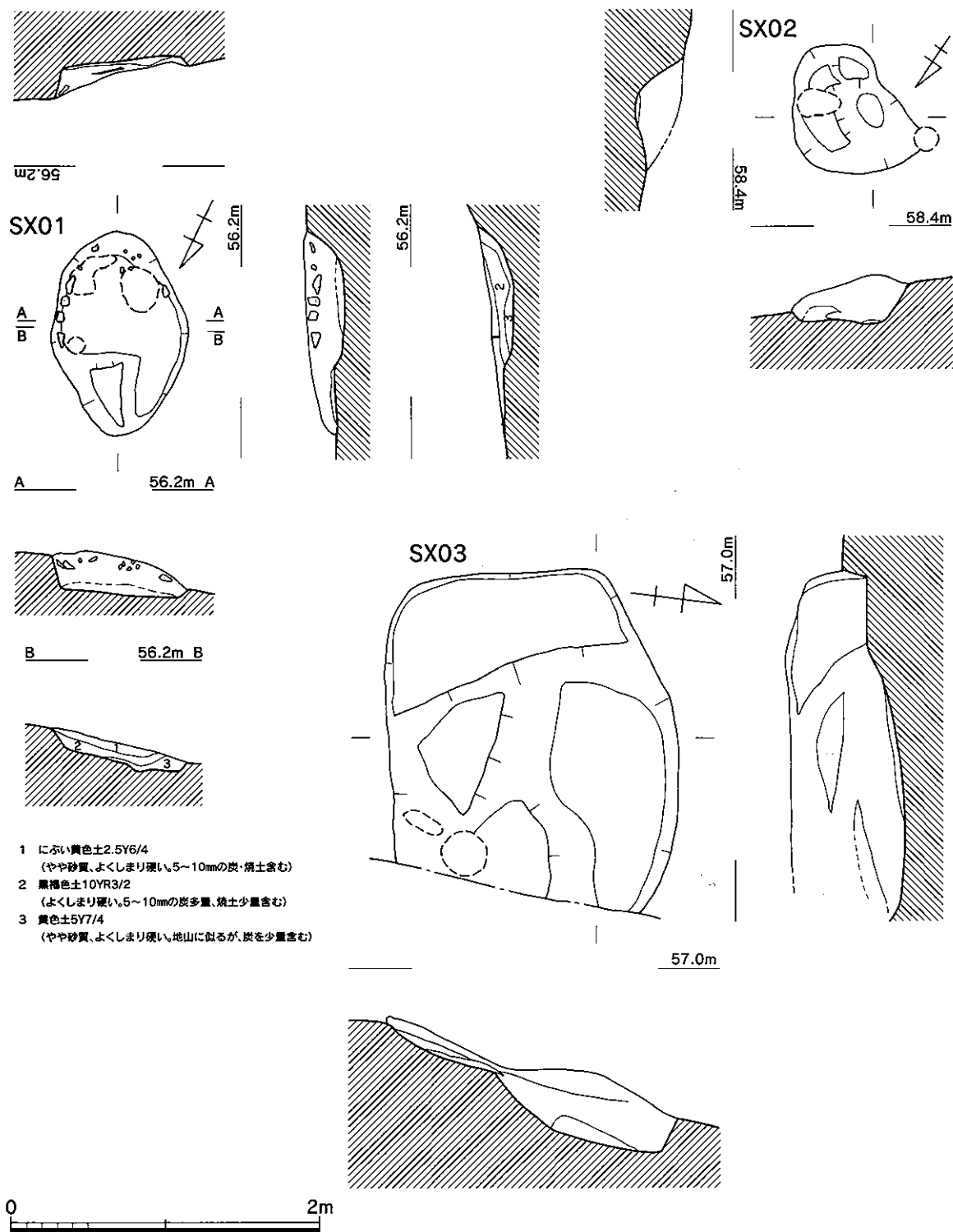
調査区中央鞍部に位置する。平面楕円形を呈し、長さ2.1m、幅1.33m、深さ0.4mを測る。北側がテラスとなり、南側が一段深い。埋土はしまりのない黄褐色土である。

SX06（第23図・図版14）

調査区中央鞍部から西に下った斜面に位置する。平面楕円形、長さ1.42m、幅1.05m、深さ0.35



第21図 雉子ヶ尾遺跡第2次調査遺構配置図 (1 / 300)



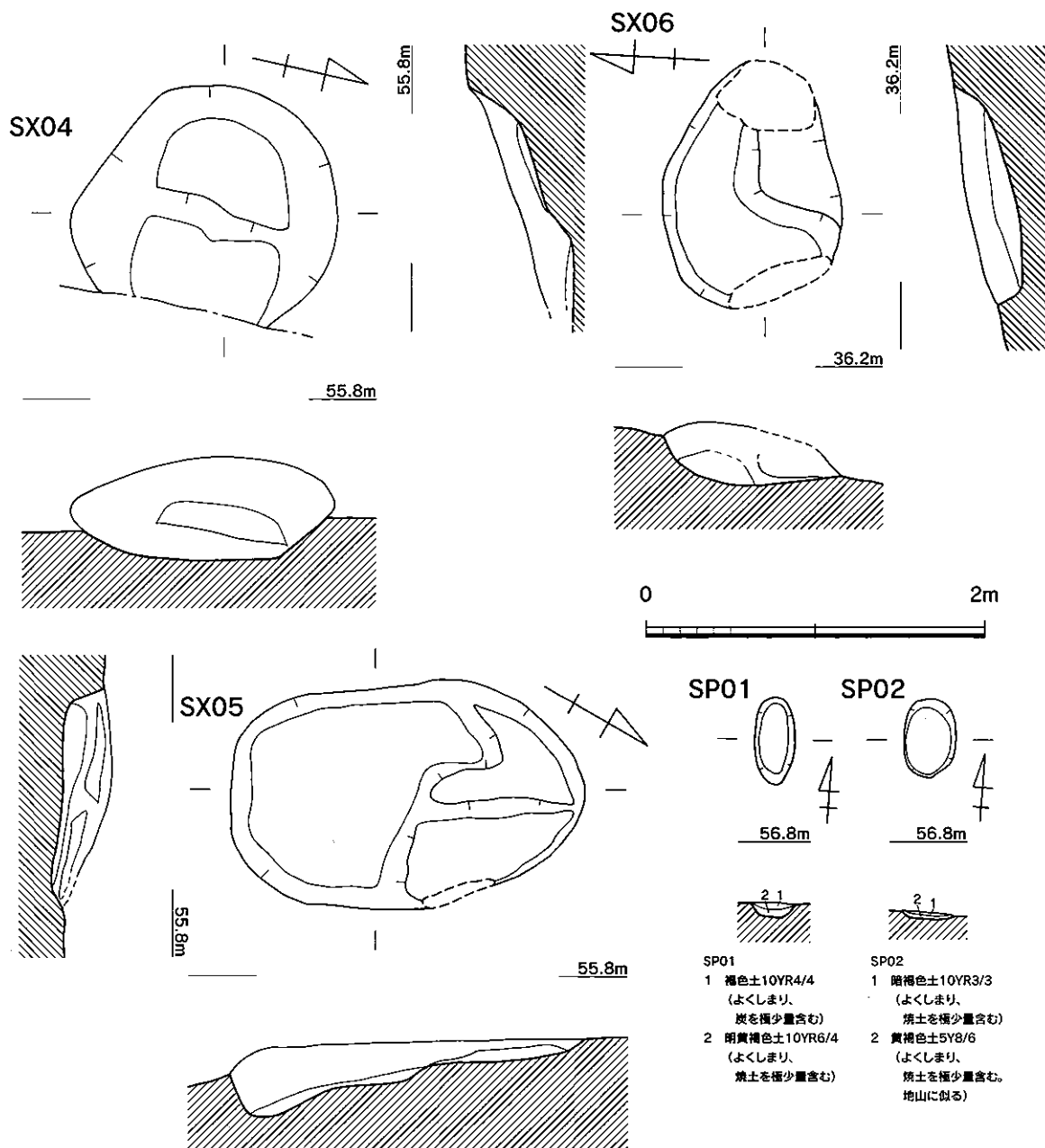
第22図 雉子ヶ尾遺跡第2次調査SX01～03実測図(1/40)

mを測る。南東側がテラスとなり、北西側がやや深くなる。埋土はしまりのない黄褐色である。

(2) ピット

SP01・02 (第23図・図版14)

調査区中央にあり、SX03を切る。いずれも平面楕円形で SP01は埋土中に少量の炭・焼土を、SP02は埋土中に少量の焼土を含む。



第23図 雉子ヶ尾遺跡第2次調査SX04～06、SP01・02実測図（1／40）

C. 小結

本調査では土坑・ピットを検出したが、出土遺物がなく時期が判明する遺構はない。また遺構密度が非常に薄く、遺物も出土していないため、調査地はほとんど利用されていないことがわかる。性格が推測できる遺構としては、SX01とした焼土坑がある。なんらかの目的で火を焚いた痕跡と考えられ、土器焼成遺構・火葬墓・炭窯などの可能性が挙げられるが、いずれも根拠がない。また調査地は四王寺山麓にあり、平野を一望できる立地であるため烽火跡等の可能性も考えたが、根拠がなく断定できない。周辺では雉子ヶ尾古墳・窯跡が調査されており、また旧石器～縄文時代の遺物も確認されている。今回確認された遺構の時期や性格は、今後周辺の調査を通じて解明していく必要がある。

V. まとめ

1. 薬師の森遺跡第3次調査検出遺構の性格と土地利用の変遷

本調査地で人類の営みが確認されるのは縄文時代以降で、おとし穴状遺構と判断したSX01から縄文時代早期の押型文土器が出土している。SX01の時期は先述したとおり縄文早期～弥生時代の幅で捉えているが、隣接する薬師の森遺跡第4次調査（未報告）や周辺の乙金山・四王寺山麓でも押型文土器や縄文早期に属する石鏃が確認されており、本調査地周辺は縄文時代早期に活発な活動があったことがうかがえる。

その後、遺構・遺物が確認できるのは古墳時代後期で、主要な遺構としてSB01・SC01・SX08等があり、集落が展開していたことがわかる。当該期の乙金地区では、乙金山山麓を中心に多数の群集墳が営まれる時期であり、さらに周辺で実施した薬師の森遺跡第4・5次調査（未報告）でもほぼ同時期の集落が確認されている。乙金地区で大規模な開発が行われた時期と考えられ、本調査地で確認した遺構も、一連の開発に伴い集落が展開した結果と理解できる。

奈良時代の遺構としてはSX09があり、時期は8世紀中頃～後半（VII B期）と考える（註1）。多量の須恵器・焼台が出土し、埋土中には炭化物・焼土を含む。須恵器のなかには焼け歪んだもの、焼成不良のもの、釉着したものがある。埋土の特徴や遺物の内容から、須恵器窯跡に関連する遺構と考えられ、当該遺構の北側が削平されていることを考慮すると、須恵器窯前庭部土坑の可能性が高く、本来は丘陵斜面に窯があったと想定できる。乙金地区では乙金窯跡・雉子ヶ尾窯跡といった6世紀後半代の須恵器窯跡が調査されているが、8世紀代にも窯の操業がおこなわれていたことが確認されたことになる。今後、周辺の調査に期待したい。

中世になると木棺墓SX11が営まれており、時期は埋納品から12世紀中頃～後半に位置づけられる（註2）。SX11の位置づけに関しては後述する。

2. 薬師の森遺跡第3次調査検出の木棺墓（SX11）について

薬師の森遺跡第3次調査において1基の木棺墓を検出し、7点の青磁が出土した。SX11の内容を詳述し、市域で確認されている中世墳墓との対比からSX11木棺墓の被葬者像について検討する。

（1）木棺墓の内容と埋納品

SX11は現状で丘陵裾の平坦面に位置するが、SX09の存在から8世紀後半段階にはSX09北端付近まで丘陵が張り出していたことは明らかである（第5図）。そのためSX11造墓の際に平坦面を造成した可能性を考えたが、調査時には明確にできなかった。本調査地でSX11と同時期の遺構・遺物は確認されておらず、居住域内に造墓する屋敷墓や複数の墓で構成される墓地とは異なり、丘陵裾に単独で営まれた墓といえる。木棺墓は墓壙主軸をN-15° 60'-Eにとり、埋納品は北側に集中して出土していることから北頭位と考える。埋納品は棺内副葬か棺外供献か決定しがたいが、全て正位置で、椀・皿ともに重なった状態で出土していること、出土状況に乱れが少ないことから棺内副葬であった可能性が高い。埋納品は龍泉窯系青磁椀2点・同安窯系青磁皿5点が出土しており、いずれも口縁部に顕著な摩滅が認められる。椀は2点とも高台の一部を欠損しており、破損面が風化していることから埋納以前に欠損していたことがわかる。こうした事例は隣接する薬師の森遺跡第4次調査（未報告）でも確認されており、葬送儀礼に際し意図的に打ち欠いた可能性があり、今後注意したい。

（2）大野城市域の11～13世紀代の墳墓（第1表）

現在までに市域で確認されている当該期の墳墓の多くは、乙金地区周辺に分布し、他は市域南部で横穴式石室再利用墓が認められる程度である。乙金地区の墳墓は丘陵上に立地し、群集すること

はなく1～2基程度が散在して営まれる。多くは土墳墓であるが、中・西コモリ遺跡で木棺墓が確認されている。埋納品はほとんどの墳墓で1～2点の輸入陶磁器が認められ、土師器杯・皿や鉄小刀を伴うものもある。時期的には、中・西コモリ遺跡例が古く11世紀後半～12世紀前半に位置づけられ、12世紀後半代になると墳墓数が増加し、13世紀代以降はほとんど認められない。当該期の集落の様相は不明であるが、墳墓の様相からは12世紀後半代に乙金地区で開発が活発になることを示すものであろうか。

以上、市域における中世墳墓について概観してきたが、次にこれらの墳墓とSX11の様相を比較する。棺の有無の面では、他の事例のほとんどが土墳墓であり、SX11が木棺墓である点で差異を示す。この差異が何を示すかは明らかではないが、遺体を保護するという点では木棺墓の方がより手厚く埋葬されていることがうかがえる。埋納品では、他の事例が輸入陶磁器1～2点を保有するのに対し、SX11が青磁7点を保有する点で大きく異なる。この点に関して、古代においては使用する食器の質によって階層が表現されたことが指摘されている(註10)。また輸入陶磁器の大量流入が始まる中世に関しては、食器の量の多寡によって階層が表現される、という意見がある(註11)。輸入陶磁器の保有量・木棺の採用や単独墓であることなどからSX11は厚葬墓といえ、被葬者は比較的高い階層の有力人物であったと考える。当該期の墳墓については先学により、特に「屋敷墓」を中心に研究が進展しており、屋敷墓成立の背景として「開発祖先」や「祖先祭祀」といった観点から説明されている。SX11は現状では屋敷墓とは認定できないが、時代背景として、開発領主が成長し新たな土地開発が進展する時期であることから、こうした視点からの検討も必要となろう。今後、居住域・生産域との関係も含め乙金地区の開発史について明らかにしていきたい。

遺跡	遺構名	遺構の種類	出土遺物 ()は点数	時期	備考	文献
薬師の森遺跡3次	SX11	木棺墓	龍泉碗Ⅰ-4類(2)、同安皿Ⅰ類(5)	12世紀中頃～後半	本報告	—
薬師の森遺跡2次	—	土坑墓	龍泉碗Ⅰ(1)、青白磁合子身(1)	12世紀中頃～後半	未報告	(註3)
薬師の森遺跡4次	SX01	土坑墓	龍泉碗Ⅱ-c類(1)	13世紀中頃～14世紀初頭	未報告	—
	SX02	土坑墓	龍泉碗Ⅰ-4a類(1)、鉄小刀(1)	12世紀中頃～後半	未報告	
	SX27	土坑墓	龍泉碗Ⅰ-2a類(1)	12世紀中頃～後半	未報告	
森園遺跡1次	SP01	土坑墓	同安碗Ⅰ-1類(1)、白磁碗Ⅳ-1a類(1)、土師器小皿(2)、鉄小刀(1)	12世紀中頃～後半	—	(註4)
	SP02	土坑墓	鉄小刀(1)	12世紀代か?	—	
中・西コモリ遺跡	—	木棺墓	白磁碗Ⅳ-1b類(1)、土師器小皿(3)	11世紀後半～12世紀前半	—	(註5)
塚口遺跡	SP07	土坑墓	白磁碗Ⅴ-4b類(1)、鉄小刀(1)	12世紀中頃～後半	—	(註6)
原口古墳	石室内	石室再利用	土師器杯(1)	13世紀代	—	(註7)
王城山古墳群A群	4号墳	石室再利用	土師器杯(1)	12世紀中頃～後半	—	
中通遺跡群	11号墳	石室再利用	瓦器碗(2)、土師器杯(3)、小皿(2)	12世紀代	—	(註8)
	12号墳	石室再利用	土師器杯(3)	12世紀前半～中頃	—	
	13号墳	石室再利用	土師器杯(2)、小皿(1)	12世紀代	—	
中通古墳	—	石室再利用	瓦器碗(1)、土師器碗(2)、杯(1)、小皿(1)	12世紀中頃～後半	—	(註9)

第1表 大野城市域における11～13世紀の墳墓

- 註1 大野城市教育委員会『牛頸窯跡群—総括報告書Ⅰ—』(大野城市文化財調査報告書第77集)2008年
 註2 太宰府市教育委員会『太宰府条坊跡XⅤ』(太宰府市の文化財第49集)2000年
 註3 大野城市教育委員会『大野城市の文化財』第33集 2001年
 註4 大野城市教育委員会『森園遺跡Ⅰ』(大野城市文化財調査報告書第26集)1988年
 註5 大野城市教育委員会『中・西コモリ遺跡』(大野城市文化財調査報告書第2集)1978年
 註6 大野城市教育委員会『塚口遺跡』(大野城市文化財調査報告書第58集)2002年
 註7 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—Ⅸ—』1977年
 註8 大野城市教育委員会『牛頸中通遺跡群』(大野城市文化財調査報告書第4集)1980年
 註9 大野城市教育委員会『牛頸中通遺跡群Ⅱ』(大野城市文化財調査報告書第9集)1982年
 註10 中島恒次郎『大宰府における碗形態の変遷』『中近世土器の基礎的研究Ⅷ』1992年
 註11 伊野近富『原型・模倣型による平安京以後の土器様相』『中近世土器の基礎的研究Ⅴ』1989年

第2表 薬師の森遺跡第3次調査出土遺物観察表①

遺物番号	種類	器種	出土地点	①口径②器高③底径 ④重さ(cm・g) ※(還元値)・(残存値)	形態・技法の特徴	A胎土B焼成C色調	備考
1	須恵器	杯身	SB01(SP03)	②(2.3)	内外面ともに回転ナデ	A1mm以下の白色粒を含むB良好C内外、灰N4	
2	須恵器	杯身	SB01(SP03)	②(2.7)	内外面ともに回転ナデ	A1mm以下の白色粒を含むB良好C内外、灰5Y6/1	
3	須恵器	杯蓋	SC01(上層)	①(14.0)②3.6	外面約1/2が回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	A2mm以下の白色粒を含むB良好C外、灰白N7内、灰N5	
4	須恵器	杯蓋	SC01(上層)	②(4.4)	外面約1/3が回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	A3mm以下の白色粒を含むB良好C外、暗灰N3内、灰N5	ヘラ記号あり
5	須恵器	杯蓋	SC01(上層)	②(3.1)	外面一部回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	A1mm以下の白色粒を含むB良好C内外、灰白10Y7/1	
6	須恵器	杯蓋	SC01(一段下)	②(2.7)	外面一部回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	A0.5mm以下の白色粒を含むB良好C内外、灰白10Y7/1	
7	須恵器	杯蓋	SC01(SP29一段下)	②(2.4)	端部付近および内面は回転ナデ、天井部外面は回転ヘラケズリ	A1mm以下の白色粒を含むB良好C外、灰白7.5Y7/1	ヘラ記号あり
8	須恵器	杯蓋	SC01(一段下)	②(2.3)	回転ナデ	A1mm以下の白色粒を含むB良好C外、灰N5内、オリブ灰5GY6/1	
9	須恵器	杯蓋	SC01(上層)	②(1.7)	回転ナデ	A1mm以下の白色粒を含むB良好C外、灰白N7内、灰N5	
10	須恵器	杯身	SC01(カマド崩落土)	①11.4②3.7	外面1/7が回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	A2mm以下の白色粒を含むB良好C外、暗黄灰5PB4/1内、灰赤10YR5/2	ヘラ記号あり
11	須恵器	杯身	SC01(上層)	①11.6②4.2	外面1/3が回転ヘラケズリ、他は回転ナデ、底部内面に同心円文当て具痕が残る	A2mm以下の白色粒を含むB良好C内外、灰N5	ヘラ記号あり
12	須恵器	杯身	SC01(下層)	①10.4②(3.0)	外面約1/2が回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	A1mm以下の白色粒を含むB良好C内外、灰7.5Y6/1	ヘラ記号あり
13	須恵器	杯身	SC01(一段下)	②(2.4)	内外面ともに回転ナデ	A1mm以下の白色粒を含むB良好C内外、灰N6	
14	須恵器	杯身	SC01(SP28崩落)	②(1.8)	内外面ともに回転ナデ	A1mm以下の白色粒を含むB良好C内外、オリブ灰2.5GY6/1	
15	須恵器	高杯or碗	SC01(一段下)	②(4.5)	外面一部回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	A1mm以下の白色粒を含むB良好C外、灰10Y5/1内、オリブ灰5GY5/1	
16	須恵器	高杯	SC01(一段下)	②(1.5)	内外面ともに回転ナデ	A0.5mm以下の白色粒を含むB良好C内外、暗灰N3	
17	須恵器	盃or甕	SC01(SP30崩落)	②(1.7)	内外面ともに回転ナデ	A1mm以下の白色粒、3mm以下の花崗岩小礫を含むB良好C外、灰7.5Y6/2内、にぶい、灰7.5YR6/4	
18	須恵器	甕	SC01(上層)	②(7.4)	外面は格子目タタキのちねいカキメ、内面は同心円文当て具痕	A2mm以下の白色粒、3mm以下の砂粒を含むB良好C外、灰白N7内、にぶい、灰7.5YR6/3	
19	土師器	甕	SC01(床面)	②(3.4)	口縁端部は回転ナデ、他は不明瞭	A1mm以下の白色粒、3mm以下の花崗岩小礫を含むBやや甘いC内外、明黄褐10YR7/6	
20	土師器	甕or甕	SC01(上層)	②(3.0)	内面はナデ、外面は不明瞭	A1.5mm以下の赤色粒、白色粒、2mm以下の花崗岩小礫を含むBやや甘いC外、灰7.5YR6/6内、灰7.5YR7/6	
21	土師器	甕or甕	SC01(カマド崩落土)	②(1.7)	内外面ともに不明瞭	A5mm以下の花崗岩小礫を含むBやや甘いC内外、浅黄緑10YR8/4	
22	土師器	甕or甕	SC01(カマド崩落土)	②(5.5)	外面端部はヨコナデ・体部は平行タタキ、内面はユビオサエ・板ナデ	A3mm以下の赤色粒、1mm以下の白色粒、5mm以下の花崗岩小礫を含むBやや甘いC外、灰7.5YR7/6内、にぶい、灰7.5YR7/4	
23	土師器	甕or甕	SC01(カマド)	②(3.7)	外面は平行タタキ、内面はナデ	A1mm以下の白色粒、2mm以下の花崗岩小礫を含むB良好C外、灰7.5YR6/6内、灰5YR6/6	
24	土師器	甕or甕	SC01(カマド)	②(12.2)	外面は平行タタキ、内面は板ナデ・工具痕	A2mm以下の赤色粒、白色粒、3mm以下の花崗岩小礫を含むBやや甘いC外、灰7.5YR6/8内、にぶい、灰7.5YR7/4	
25	石製品	カマド支脚	SC01(カマド)	②(16.2)最大幅13.7 厚さ10.6②2.85kg	-	-	花崗岩製
26	石製品	カマド支脚	SC01	②19.2最大幅11.0 厚さ9.5②2.75kg	-	-	花崗岩製
27	縄文土器	鉢	SX01(1層)	②(2.3)	外面は緩い凹凸の横溝押印文、内面は不明瞭	A3mm以下の白色粒、花崗岩小礫を含むB良好C内外、灰5YR6/6	押印文土器
28	石器	石鏃	SX01(1層)	全長3.5基部幅2.7 ④13.5	-	-	安山岩製
29	須恵器	高杯	SX02	②(4.5)	内外面ともに回転ナデ	A2mm以下の白色粒を含むB良好C内外、灰N5	
30	須恵器	高杯	SX04	②(2.7)③13.4	内外面ともに回転ナデ	A1mm以下の白色粒を含むB良好C内外、灰白7.5Y7/2	
31	石器	剥片	SX04	②(3.4)	-	-	安山岩製
32	須恵器	甕	SX07	②(4.4)	外面は縦格子タタキ目、内面は同心円文当て具痕	A1mm以下の赤色粒、黒色粒、白色粒を含むB良好C外、暗灰N3内、灰N4	
33	須恵器	杯蓋	SX08	①(12.4)②(2.7)	内外面ともに回転ナデ	A3mm以下の白色粒を含むB良好C外、灰N4内、灰N6	ヘラ記号あり
34	須恵器	杯蓋	SX08	②(2.3)	外面は回転ヘラケズリおよび回転ナデ、内面は回転ナデ	A2mm以下の白色粒を含むB良好C外、灰10Y5/1内、灰N6	ヘラ記号あり
35	須恵器	杯蓋	SX08	②(1.1)	端部側は回転ナデ、天井部外面は回転ヘラケズリ、天井部内面は静止ナデ	A1mm以下の白色粒を含むB良好C内外、灰N6	
36	須恵器	杯身	SX08	②(2.3)	内外面ともに回転ナデ	A2mm以下の白色粒を含むB良好C外、灰10Y5/1内、灰N6	
37	須恵器	中甕	SX08	②(52.3)最大径49.8 長さ4.4短径3.7 厚さ0.9④19.9	外面は縦格子タタキ目、内面は同心円文当て具痕	A3mm以下の白色粒を多く含むB良好C外、灰N4～灰白N7内、灰N5～灰白N7	
38	石製品	円盤形石製品	SX08	長さ4.4短径3.7 厚さ0.9④19.9	-	-	砂岩製
39	須恵器	杯蓋	SX09	①(11.4)②3.0	端部付近および内面は回転ナデ、天井部外面は回転ヘラケズリ・回転ナデ	A2mm以下の白色粒を含むB良好C内外、灰N5	重なり焼痕
40	須恵器	杯蓋	SX09(黒褐色土)	①(13.4)②1.4	端部付近は回転ナデ、天井部内外面は静止ナデ、つまみ付近は回転ナデ	A2mm以下の白色粒を含むB良好C外、灰白10Y7/1内、灰白7.5Y7/1	
41	須恵器	杯蓋	SX09(黒褐色土)	①(14.2)②2.2	端部付近は回転ナデ、天井部外面は回転ヘラケズリ、天井部内面は静止ナデ	A2mm以下の白色粒を含むB良好C外、灰N5内、オリブ灰2.5GY5/1	
42	須恵器	杯蓋	SX09(黒褐色土)	①(14.4)②3.0	端部付近は回転ナデ、天井部内外面は静止ナデ	A2mm以下の白色粒を含むB良好C外、灰5Y7/1内、灰7.5Y6/1	
43	須恵器	杯蓋	SX09(黒褐色土)	①(14.2)②1.6	端部付近は回転ナデ、天井部外面は回転ヘラケズリ、天井部内面は静止ナデ	A2mm以下の白色粒を含むB良好C外、灰7.5Y6/1内、灰白10Y7/1	
44	須恵器	杯蓋	SX09(黒褐色土)	①(14.4)②1.5	端部付近は回転ナデ(部分的に所須匠間)、天井部外面は回転ヘラケズリ、天井部内面は静止ナデ	A3mm以下の白色粒を含むB良好C内外、灰白N6	
45	須恵器	杯蓋	SX09(黒褐色土)	①(16.8)②1.0	内外面ともに回転ナデ	A1mm以下の白色粒を含むB良好C内外、灰N6	
46	須恵器	杯蓋	SX09(灰褐色土)	②(1.3)	内外面ともに回転ナデ	A1.5mm以下の白色粒を含むB良好C内外、灰N5	
47	須恵器	杯身	SX09(黒褐色土)	①(12.5)②4.3③7.4	口縁～体部は回転ナデ、底部内面は静止ナデ、底部外面は静止ナデ	A1mm以下の白色粒、2mm以下の半透明砂粒を含むB良好C内外、灰白5Y7/1	焼けすみ
48	須恵器	杯身	SX09(黒褐色土)	①12.6②4.4③7.7	口縁～体部は回転ナデ、底部内面は静止ナデ、底部外面は回転ナデのち静止ナデ	A2mm以下の白色粒を含むB良好C内外、灰白5Y7/1	焼けすみ
49	須恵器	杯身	SX09(灰褐色土)	①(13.3)②4.1③7.7	口縁～体部は回転ナデ、底部内面は静止ナデ、底部外面は静止ナデ	A1mm以下の白色粒を含むB良好C外、灰黄2.5Y7/2～灰10Y6/1内、灰黄2.5Y7/2	焼けすみ
50	須恵器	杯身	SX09(黒褐色土)	①13.8②4.2③7.4	口縁～体部は回転ナデ、底部内面は静止ナデ、底部外面は板状圧痕	A2mm以下の白色粒を含むB良好C外、灰5Y6/1内、灰白7.5Y7/1	重なり焼痕 焼けすみ
51	須恵器	杯身	SX09(黒褐色土)	②(3.9)	口縁～体部は回転ナデ	A2mm以下の白色粒を含むB良好C内外、灰白10Y7/1	
52	須恵器	杯身	SX09(黒褐色土)	②(1.7)③6.0	体部は回転ナデ、底部内面は静止ナデ、底部外面は板状圧痕	A2mm以下の白色粒を含むB良好C内外、灰N6	重なり焼痕
53	須恵器	杯身	SX09(黒褐色土)	②(2.7)③6.1	体部は回転ナデ、底部内面は静止ナデ、底部外面は板状圧痕	A1mm以下の白色粒を含むB良好C内外、にぶい、灰7.5YR7/4	
54	須恵器	杯身	SX09(黒褐色土)	②(2.5)③7.6	体部は回転ナデ、底部内面は静止ナデ、底部外面は板状圧痕	A1.5mm以下の白色粒を含むB良好C内外、灰N6	

第2表 業師の森遺跡第3次調査出土遺物観察表②

遺物番号	種類	器種	出土地点	①口径②器高③底径④重さ(cm・g) ※(復元値)・(残存値)	形態・技法の特徴	A胎土B焼成C色調	備考
55	須恵器	杯身+蓋	SX09(黒褐色土)	①(12.0)・①(12.4) ②4.0・2.8	蓋・肩部は回転ナデ、天井部は静止ナデ 身・内外面共に回転ナデ	蓋・A1.5mm以下の白色粒を含むB良好C外、灰N3内、灰N5 身・A1.5mm以下の白色粒を含むB良好C外、灰N6内、灰N5	重ね焼き状態で観察
56	須恵器	杯	SX09(黒褐色土)	①(13.1)・②3.9③7.6	口縁～体部は回転ナデ、底部内面は回転ナデ、底部外面は静止ナデ	A2mm以下の白色粒を含むB良好C内外、灰黄2.5Y6/2	
57	須恵器	杯	SX09(黒褐色土)	①(14.2)・②3.3③(8.8)	口縁～体部は回転ナデ、底部内面は静止ナデ、底部外面は静止ナデ	A3mm以下の白色粒を含むB良好C内外、灰N5	へう記号あり
58	須恵器	杯	SX09	②(2.5)③(8.8)	口縁～体部は回転ナデ、底部内面は静止ナデ、底部外面は板状圧痕	A2mm以下の白色粒を含むB良好C内外、灰白5Y7/2	
59	須恵器	皿	SX09(黒褐色土)	①(14.2)・②1.7 ③(10.6)	口縁～体部は回転ナデ、底部内面も回転ナデ、底部外面は静止ナデ	A1mm以下の白色粒を含むB良好C内外、灰白5Y7/2	
60	須恵器	皿	SX09(黒褐色土)	②(1.5)③(13.4)	体部は回転ナデ、底部内面も回転ナデ、底部外面は不定方向ナデ	A1.5mm以下の白色粒を含むB良好C内外、灰白10Y7/1	
61	須恵器	壺	SX09(黒褐色土)	②(2.4)	外面は回転ヘラズリ、内面は回転ナデ	A2mm以下の白色粒を含むB良好C内外、灰N6	
62	青磁	碗	SX11	①16.3②7.2③6.0	型付き～高台内が露胎	A1mm以下の砂粒をわずかに含むB良好 C胎、にぶい黄褐色10YR5/4胎、オリブ灰2.5GY6/1	瀬京系青磁碗 太宰府分類Ⅰ-4a類
63	青磁	碗	SX11	①16.2②7.1③6.3	高台内から、一部高台外面まで露胎	A1mm以下の白色粒を含むB良好 C胎、灰白10Y8/1胎、灰オリブ7.5Y5/3	瀬京系青磁碗 太宰府分類Ⅰ-4a類
64	青磁	皿	SX11	①10.2②2.3③4.5	底部外面のみズリにより露胎	A1mm以下の白色粒を含むB良好 C胎、灰N6胎、灰オリブ7.5Y6/2	同安楽系青磁皿 太宰府分類Ⅰ-2b類
65	青磁	皿	SX11	①10.8②2.2③4.5	底部外面のみズリにより露胎	A1mm以下の白色粒を含むB良好 C胎、灰白2.5Y7/1胎、オリブ灰5GY6/1	同安楽系青磁皿 太宰府分類Ⅰ-2b類
66	青磁	皿	SX11	①10.0②2.5③5.3	底部外面のみズリにより露胎	A1mm以下の白色粒を含むB良好 C胎、浅黄2.5Y7/3胎、オリブ灰2.5GY6/1	同安楽系青磁皿 太宰府分類Ⅰ-1b類
67	青磁	皿	SX11	①10.8②2.4③5.5	底部外面のみズリにより露胎	A1mm以下の白色粒を含むB良好 C胎、灰白10Y7/2胎、オリブ灰10Y6/2	同安楽系青磁皿 太宰府分類Ⅰ-2b類 底部外面に墨書
68	青磁	皿	SX11	①9.4②1.9③4.4	底部外面のみズリにより露胎	A1mm以下の白色粒を含むB良好 C胎、灰黄褐色10YR6/2胎、オリブ灰2.5GY6/1	同安楽系青磁皿 太宰府分類Ⅰ-1a類
69	鉄製品	釘	SX11	長さ(7.2)④12.6	-	-	断面形は正方形
70	鉄製品	釘	SX11	長さ(5.8)④6.3	-	-	断面形は正方形
71	鉄製品	釘	SX11	長さ(4.4)④4.5	-	-	断面形は正方形
72	鉄製品	釘	SX11	長さ(3.3)④3.8	-	-	断面形は長方形
73	鉄製品	釘	SX11	長さ(3.0)④1.1	-	-	断面形は正方形
74	須恵器	杯蓋	SX10	②(2.0)	肩部付近は回転ナデ、天井部外面は回転ヘラズリのちかきメ、天井部内面は静止ナデ	A3mm以下の白色粒、4mm以下の花崗岩小礫を含むB良好 C内外、灰N5	抱け蓋み
75	須恵器	杯身	SX11	②(2.8)	外面は回転ヘラズリ、内面は回転ナデ	A2mm以下の白色粒を含むB良好 C外、略オリブ灰2.5GY4/1内、灰N6	外面降灰
76	須恵器	杯蓋	SX13	②(0.8)	内外面ともに回転ナデ	A1mm以下の白色粒を含むB良好C外、灰5Y5/1内、灰白5Y7/1	
77	須恵器	壺	SX12	②(3.5)	外面は縦筋ナデ、内面は同心円文当て具痕	A2mm以下の白色粒を含むB良好C外、灰白N7内、灰N5	
78	須恵器	壺	SX12	②(12.2)	外面は平行ナデ、内面は同心円文当て具痕	A2mm以下の白色粒、5mm以下の花崗岩小礫を含むB良好 C内外、オリブ灰2.5GY6/1	
79	須恵器	杯or碗?	SP17	②(3.9)	内外面ともに回転ナデ	A1mm以下の白色粒、2mm以下の花崗岩小礫を含むB良好 C外、灰7.5Y3/1内、オリブ灰2.5GY6/1	
80	土師器	杯	SP21	②(2.5)	内外面ともに不明瞭	A2mm以下の赤色粒を含むB良好C内外、浅黄褐色10YR8/3	
81	黒色土器A類	碗	SP21	②(2.6)	内面回転ナデ、外面は不明瞭	A2mm以下の赤色粒を含むB良好C外、灰白2.5Y8/2内、黄灰2.5Y4/1	
82	土師器	高杯?	SP26	②(1.2)	内外面ともに不明瞭	A1.5mm以下の赤色粒を含むB良好C内外、明赤褐色5YR5/8	
83	土師器	不明	SP33	②(1.8)	内外面ともに不明瞭	A1mm以下の白色粒を含むB良好C内外、灰白10YR8/2	
84	須恵器	杯蓋	SP39	②(1.4)	外面は回転ヘラズリ、内面は回転ナデ及び静止ナデ	A1mm以下の白色粒を含むB良好C内外、明オリブ灰5GY7/1	
85	土師器	甕	SX18周辺	②(2.2)	内外面ともに不明瞭	A1mm以下の白色粒、3mm以下の赤色粒、花崗岩小礫を含む B良好C内外、浅黄褐色10YR8/4	
86	土師質土器	鍋	SX18周辺	②(2.8)	外面は不明瞭、内面は横位のハケメ	A1mm以下の白色粒、5mm以下の花崗岩小礫を含むB良好 C外、にぶい黄褐色10YR6/4内、黄灰10YR5/1	
87	須恵器	杯蓋	表録	②(1.0)③(13.8)	肩部付近および天井部外面は回転ナデ、天井部内面は静止ナデ	A2mm以下の白色粒、花崗岩小礫を含むB良好C内外、灰N5	
88	土師器	杯or小皿	表録	②(0.8)③(6.0)	外面は静止ナデ、内面は回転ナデ	A1mm以下の白色粒を含むB良好 C外、にぶい黄褐色10YR6/3内、浅黄2.5Y8/3	
89	青磁	碗	表録	②(4.2)	白色土を象嵌し施釉	A1mm以下の白色粒、黒色粒を含むB良好 C内外、にぶい黄褐色10YR5/3～灰5Y5/1胎、灰N5	高麗系青磁
90	須恵器	杯蓋	SX09付近表土剥ぎ時	①(10.2)②(2.5)	肩部付近は回転ナデ、天井部外面は回転ヘラズリ、天井部内面は静止ナデ	A1mm以下の白色粒、5mm以下の花崗岩小礫を含むB良好 C内外、灰N6	
91	須恵器	杯蓋	SX09付近表土剥ぎ時	②(2.5)	肩部付近は回転ナデ、天井部外面は回転ヘラズリ、天井部内面は静止ナデ	A1mm以下の白色粒を含むB良好C内外、灰白2.5Y7/1	
92	土師器	碗	調査区西側表土剥ぎ時	②(2.8)③7.4	高台内は指頭圧痕、高台はナデ	A2mm以下の赤色粒、白色粒、花崗岩小礫を含むB良好 C内外、浅黄褐色10YR8/4	
93	土師器	碗	SX09付近表土剥ぎ時	②(1.8)③7.1	内外面ともに不明瞭	A1mm以下の白色粒、3mm以下の花崗岩小礫を含むB良好 C内外、にぶい黄褐色7.5YR7/4	

圖 版

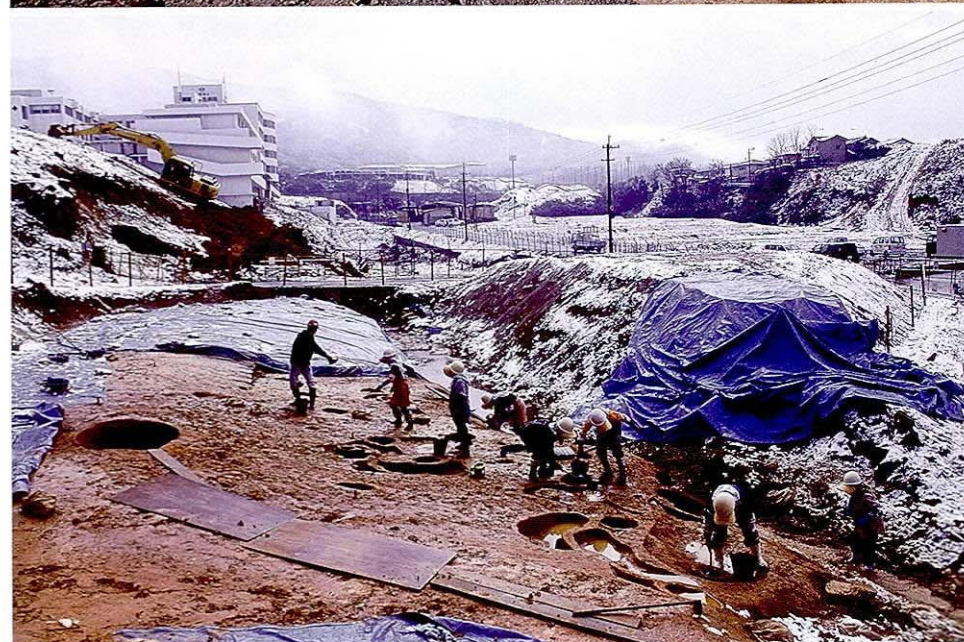
(1) 薬師の森遺跡第3次調査
調査前風景（南東から）



(2) 薬師の森遺跡第3次調査
検出状況（南東から）



(3) 薬師の森遺跡第3次調査
作業風景（西から）





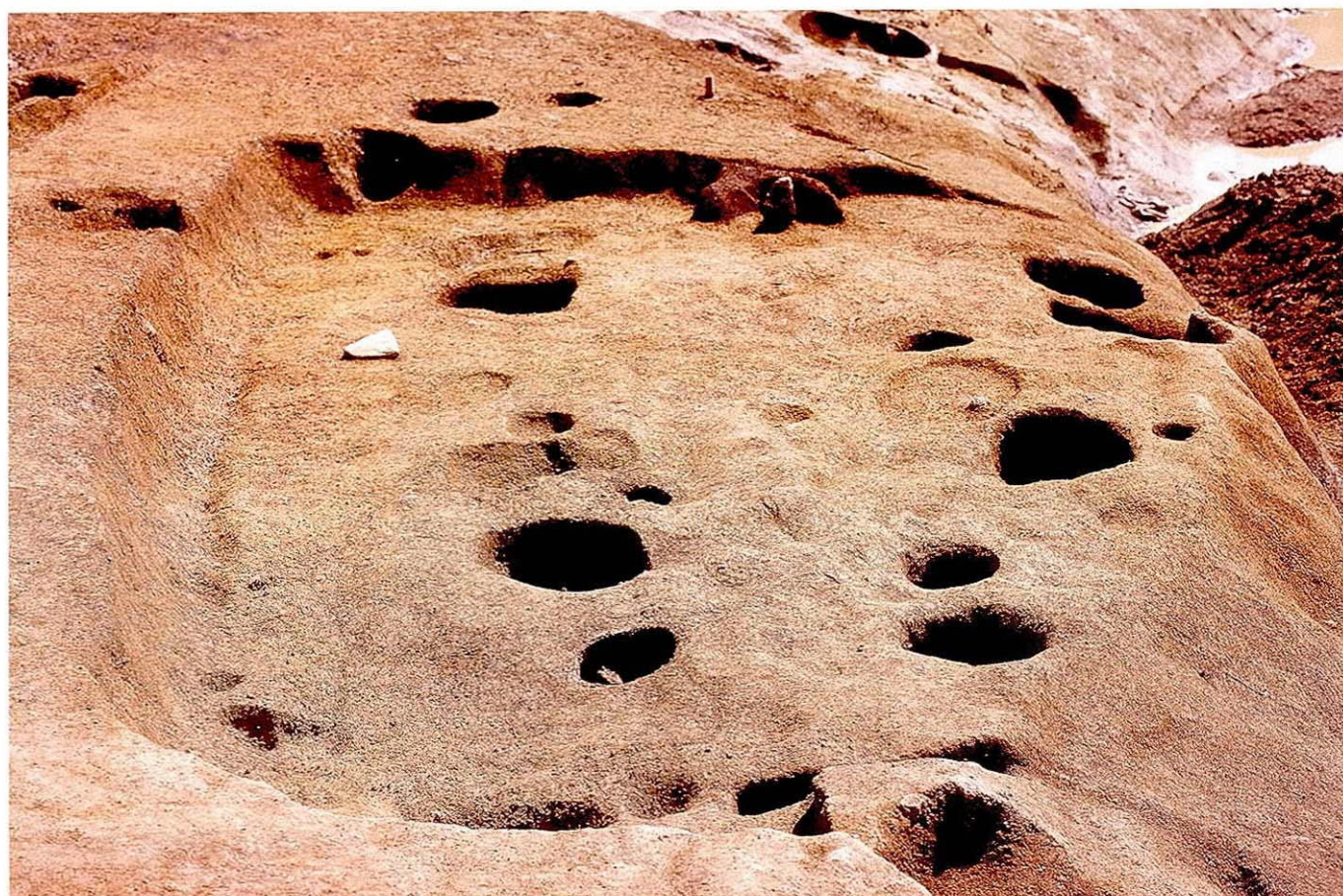
(1) 薬師の森遺跡第3次調査 SB01全景（南から）



(2) 薬師の森遺跡第3次調査 SB02全景（北東から）



(1) 薬師の森遺跡第3次調査 SC01全景（南から）



(2) 薬師の森遺跡第3次調査 SC01全景（西から）



(1) 薬師の森遺跡第3次調査
SC01検出状況
(南から)



(2) 薬師の森遺跡第3次調査
SC01南北土層
(東から)



(3) 薬師の森遺跡第3次調査
SC01東西土層
(南から)

(1) 薬師の森遺跡第3次調査
SC01カマド検出状況
(西から)



(2) 薬師の森遺跡第3次調査
SC01カマド土層
(西から)

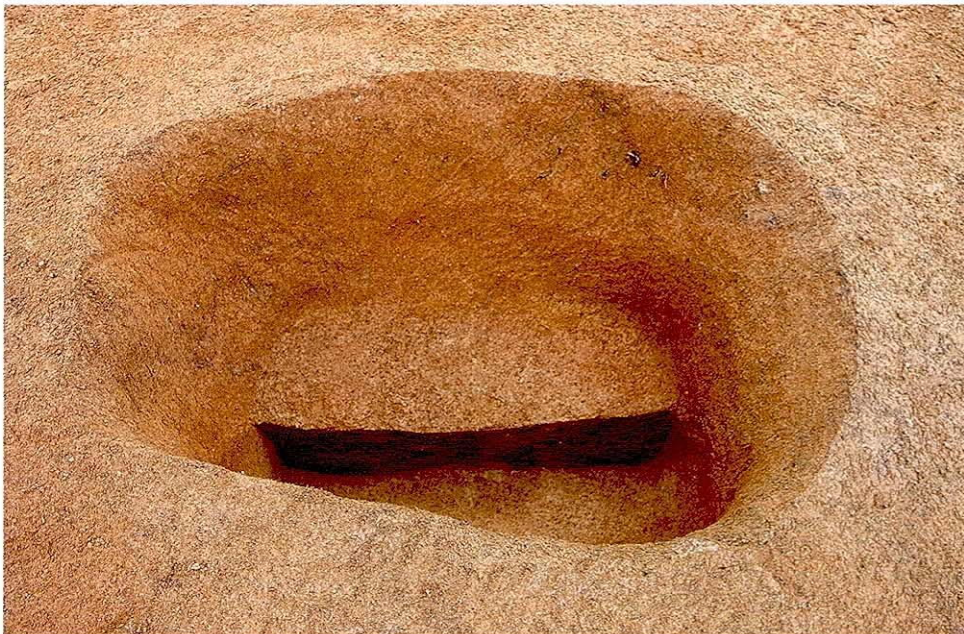


(3) 薬師の森遺跡第3次調査
SC01カマド全景
(西から)





(1) 薬師の森遺跡第3次調査
SX01土層
(南から)



(2) 薬師の森遺跡第3次調査
SX01上面ピット
検出状況
(南から)



(3) 薬師の森遺跡第3次調査
SX01底面ピット
検出状況
(南から)

(1) 薬師の森遺跡第3次調査
SX01底面ビット
杭痕検出状況
(南から)



(2) 薬師の森遺跡第3次調査
SX01底面ビット
杭痕完掘状況
(南から)



(3) 薬師の森遺跡第3次調査
SX01全景
(東から)





(1) 薬師の森遺跡第3次調査
SX06土層
(南から)



(2) 薬師の森遺跡第3次調査
SX06全景
(南から)



(3) 薬師の森遺跡第3次調査
SX08全景
(東から)



(1) 薬師の森遺跡第3次調査 SX09土層（南から）



(2) 薬師の森遺跡第3次調査 SX09全景（南から）



(1) 薬師の森遺跡第3次調査
SX11調査風景
(南から)



(2) 薬師の森遺跡第3次調査
SX11土層
(南から)



(3) 薬師の森遺跡第3次調査
SX11遺物出土状況
(東から)



(1) 薬師の森遺跡第3次調査 SX11全景（西から）



(2) 薬師の森遺跡第3次調査 SX11遺物出土状況（南から）



(1) 雉子ヶ尾遺跡第2次調査 SX01土層（西から）

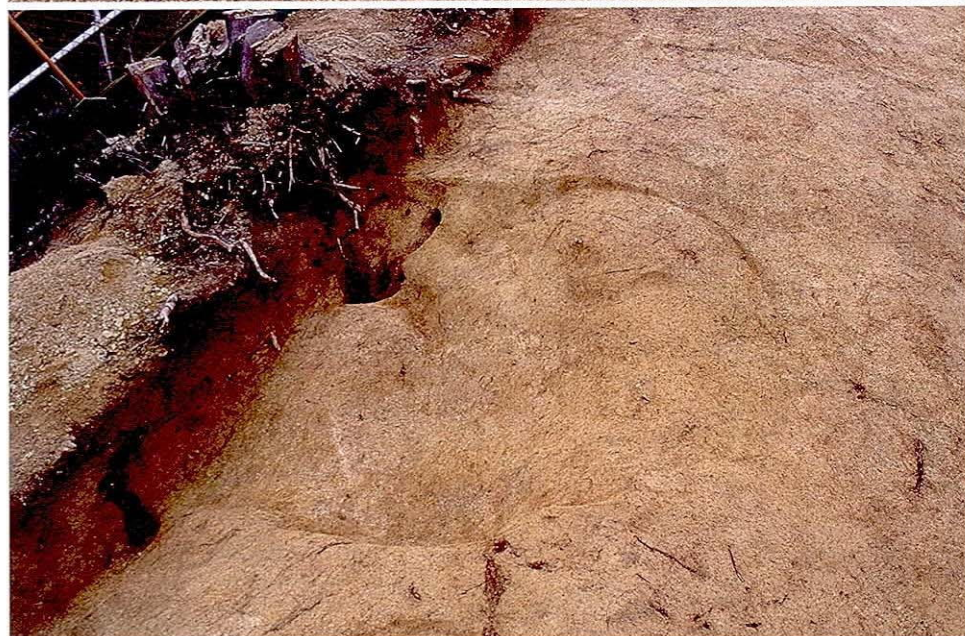


(2) 雉子ヶ尾遺跡第2次調査 SX01全景（北から）

(1) 雉子ヶ尾遺跡第2次調査
SX02全景
(東から)



(2) 雉子ヶ尾遺跡第2次調査
SX03全景
(北から)



(3) 雉子ヶ尾遺跡第2次調査
SX04全景
(南から)





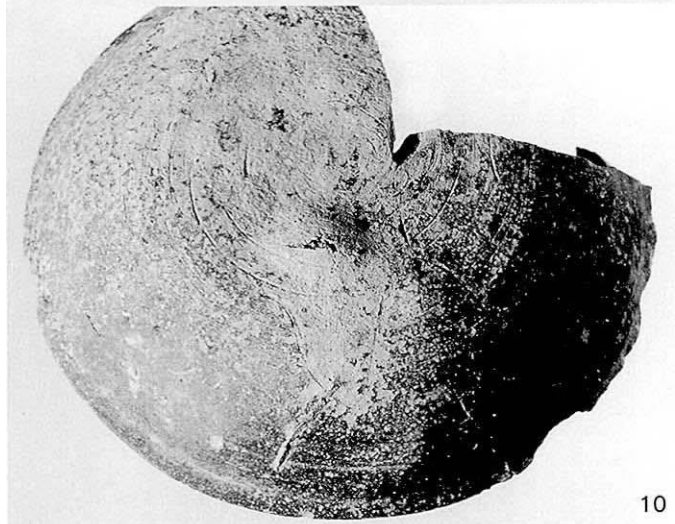
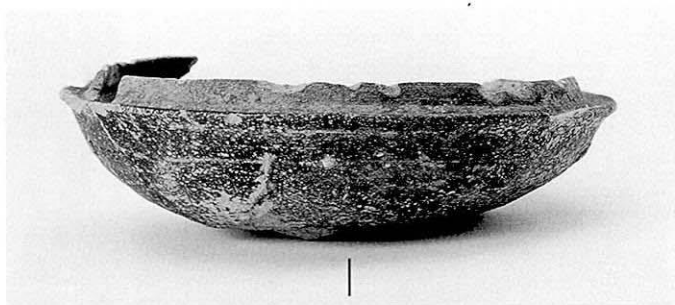
(1) 雉子ヶ尾遺跡第2次調査
SX05全景
(北から)



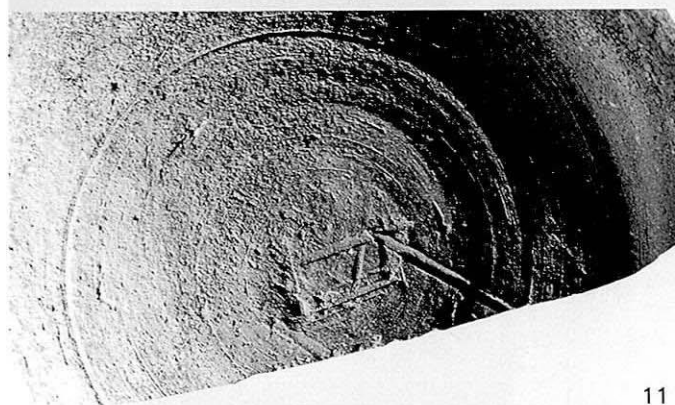
(2) 雉子ヶ尾遺跡第2次調査
SX06全景
(南から)



(3) 雉子ヶ尾遺跡第2次調査
SP01・02全景
(北から)



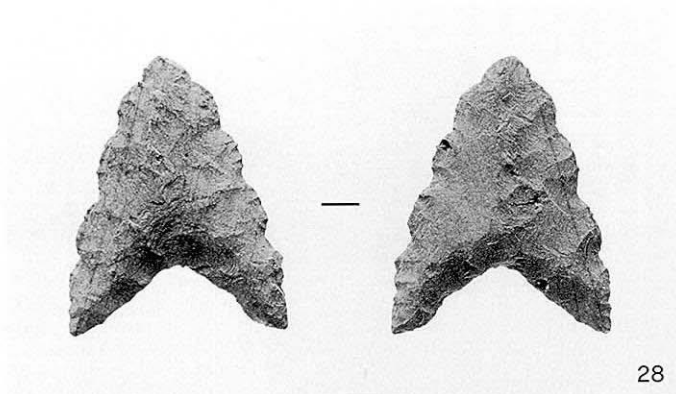
10



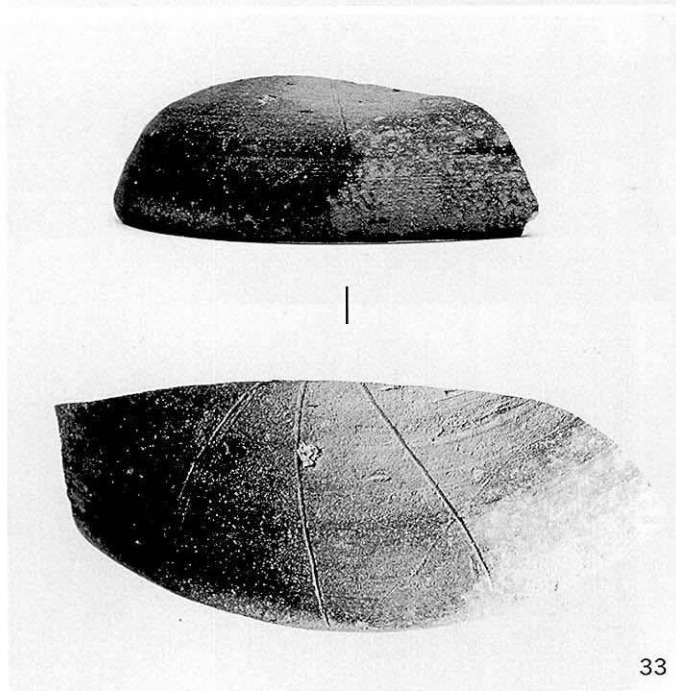
11



27



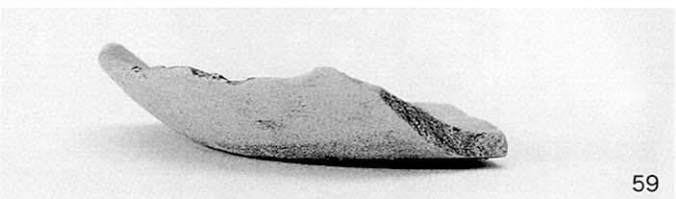
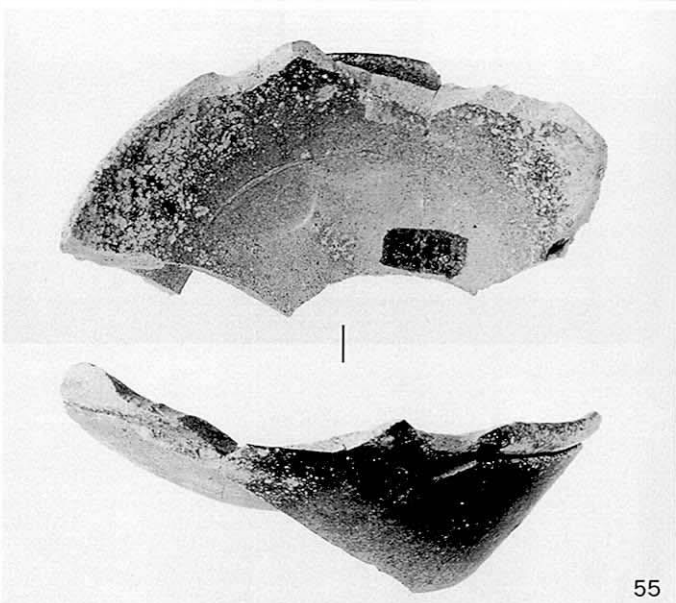
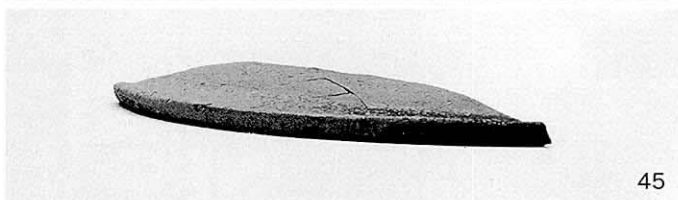
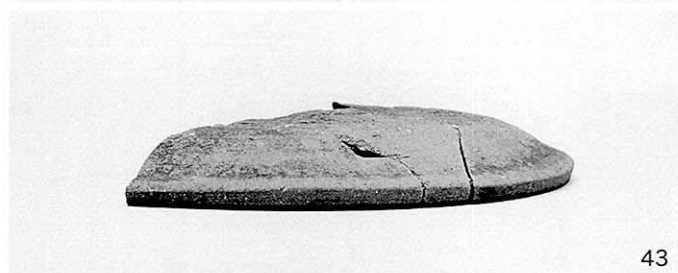
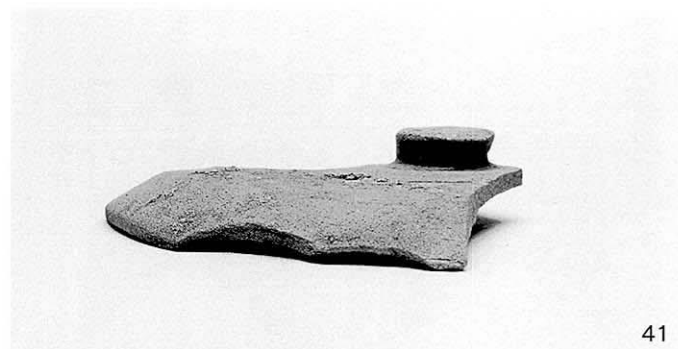
28



33



37







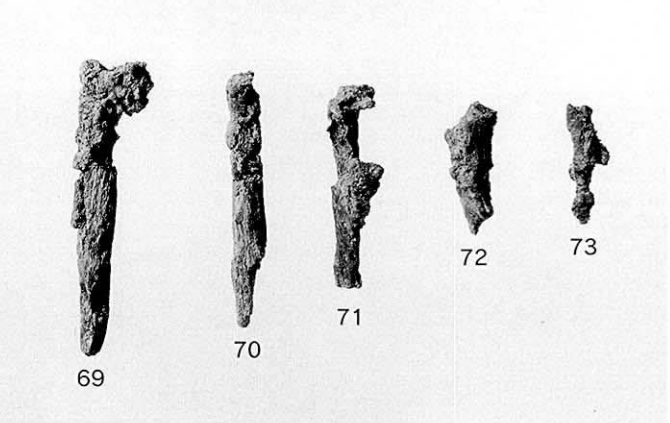
66



67



68



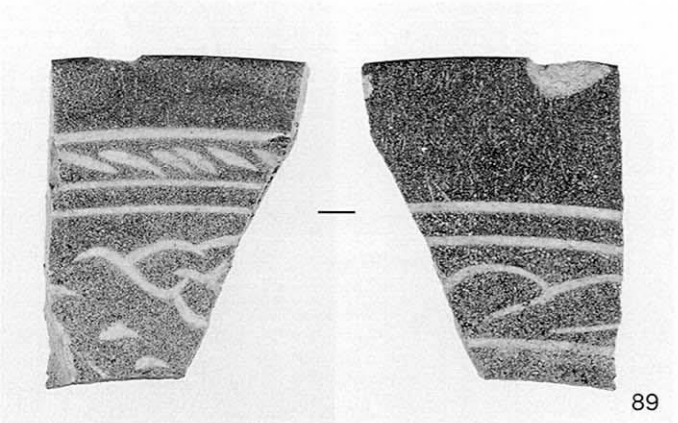
69

70

71

72

73



89

報告書抄録

ふりがな	おとがなちくいせきぐん いち								
書名	乙金地区遺跡群 I								
副書名	乙金第二土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書								
巻次	I								
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書								
シリーズ番号	第90集								
編著者名	上田 龍児・林 潤也								
編集機関	大野城市教育委員会								
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町2丁目2番1号 電話092(501)2211								
発行年月日	2009年3月31日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地		コード 市町村 遺跡番号		北緯 。' "	東経 。' "	調査期間	調査面積	調査原因
やくしのもりいせき 薬師の森遺跡 第3次調査	ふくおかけんおおのじょうおとがな 福岡県大野城市乙金 3丁目187番地他				130° 29' 45"	33° 32' 33"	2008.2.14 ～ 2008.3.31	400㎡	区画整理
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
薬師の森遺跡 第3次調査	集落遺跡	縄文～鎌倉	竪穴住居跡 掘立柱建物 木棺墓・土坑		須恵器・土師器・ 縄文土器・陶磁器・ 石器・鉄製品		12世紀後半代の木棺墓から7点 の青磁が出土。高階層の人物が 埋葬されていたと考えられる。		
要約	調査地は丘陵南側の斜面裾部に位置し、縄文時代～中世にいたる遺構・遺物が出土した。掘立柱建物・竪穴住居・土坑などが確認された。弥生時代以前の遺構として、おとし穴状遺構があり、押型文土器・安山岩製石鏃が出土した。古墳時代には、後期に属する掘立柱建物・竪穴住居・土坑があり、小規模な集落があったと考えられる。奈良時代の土坑からは、8世紀中頃～後半の須恵器や焼台が多量に出土し、焼け歪んだもの・生焼けのもの・釉着したものがある。須恵器窯跡の前庭部土坑の可能性が高く、丘陵斜面に窯跡があったと考えられるが、削平のため窯体は残っていない。中世には木棺墓が単独で営まれており、埋納品として7点の青磁が出土した。青磁を多量に埋納していることから比較的高い階層の人物が埋葬されていたと考えられる。時期は12世紀中頃～後半に位置づけられる。								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地		コード 市町村 遺跡番号		北緯 。' "	東経 。' "	調査期間	調査面積	調査原因
きじがおいせき 雉子ヶ尾遺跡 第2次調査	ふくおかけんおおのじょうおおあざおとがな 福岡県大野城市大字乙金 124他				130° 29' 56"	33° 32' 24"	2008.1.24 ～ 2008.2.7	690㎡	区画整理
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
雉子ヶ尾遺跡 第2次調査	不明	不明	焼土坑・土坑 ピット		炭化物				
要約	焼土坑・土坑・ピットを検出したが、出土遺物がないため時期を確定することはできなかった。また、遺構の性格についても性格を推定しうる情報が乏しいため、不明な点が多い。								

大野城市文化財調査報告書 第90集

乙金地区遺跡群 I

平成21年3月31日

発 行 大野城市教育委員会
福岡県大野城市曙町2-2-1

印 刷 大道印刷株式会社
福岡県春日市日の出町6-23